2019 年度文部科学省採択

地域との協働による高等学校教育改革推進事業

（グローカル型）

2021 年度研究開発実施報告書

【第 3 年次・最終年度】

和歌山信愛中学校高等学校

はじめに

和歌山信愛高等学校　校長　平良優美子

「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローカル型)」(以下「地域協働事業」）研究開発実施報告書の巻頭言にあたり、SGH アソシエイトプログラム活動からの 9 年間、これまでに様々な形で多くの方から有形無形のご協力をいただきましたこと、心より感謝申し上げます。本校の設立母体である「ショファイユの幼きイエズス修道会」のコンセプトは、生まれたばかりの無力な赤ん坊のイエス（幼きイエズス）を、見返りを求めずに守り慈しむ強く優しくしなやかな母マリアのような女性を育てる、というものです。この修道会は貧困家庭や孤児の面倒を見るという活動から修道会に発展し、フランスの片田舎ショファイユで 1859 年に創立されました。明治の初めにフランスから 4 人のシスターが来日し、大阪で同じような活動を始めました。明治初めの日本はフランスからみると未知の国で、4 人のシスターたちのチャレンジ精神やエネルギーたるやそれは大変なものであったと思います。当時の手記をみると、大変な苦労の中、自分たちのシーツを裂いておむつにし、米を重湯にしてミルク代わりにするなど献身的に活動しながら周囲の理解を得、その活動を広げていきました。修道会の創設以来、本校にも脈々と受け継がれているのが、見返りを求めず人に尽くす、可能性を追究する、物事や人の背景を考える、持っている力を伸ばす努力・工夫をする、という理念です。この理念は今まさに必要とされている問題解決能力、チャレンジ精神などに合致するものであり、「地域協働事業」プログラムは、本校の理念を体現できるものと言えます。 2021 年度で 3 年間のプログラムを終えましたが、コロナ禍にもかかわらず、生徒も教員も工夫を凝らしながら、自分たちの探究活動に打ち込んでいました。どのような状況であれ創意工夫を重ね可能性を追求する生徒や先生方の姿勢はまさに本校の理念を体現したもので、非常に感銘を受けました。「地域協働事業」では、地域と世界の両方の視点を持って社会に貢献していける女性「Key Girl」を育てることを目標にしておりました。今後、先行き不透明な状況の中、本校の生徒が少しでも地域に貢献し、それがこれからの地域での女子生徒のモデルの一つになることを楽しみにしています。本校では「地域協働事業」のプログラムは終えましたが、引き続き課題を解決するプログラムを行ってまいります。今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

2019 年度文部科学省指定
「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローカル型)」
2021 年度研究開発実施報告書【第 3 年次・最終年度】

はじめに ……1

目次……2

Ⅰ　研究開発の概要
①　研究開発概要図……3
②　研究開発の概要……4
③　育成を目指す人材像 ……6
④　高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制
⑤　海外交流アドバイザー（グローカル型のみ)・地域協働学習実施支援員
⑥　三カ年の実施内容、実施方法およびスケジュール……7
⑦　目標設定シート……11

Ⅱ　具体的な研究開発内容報告
①　開発単位Ⅰ「リージョン探究」(現高校 1 年生対象　※4 月から実施）……13
②　開発単位Ⅱ「グローバル探究」(現高校 2 年生対象）……46
③　開発単位Ⅲ「キャリア探究」(現高校 3 年生対象　※プレ活動）……70
④　開発単位Ⅱ「グローバル探究」(現高校 1 年生対象　※本来は 1 月開始予定）……95
⑤　開発単位Ⅲ「キャリア探究」(現高校 2 年生対象　※本来は 1 月開始予定）……97
⑥　開発単位Ⅳ 各教科による「ミニ探究」授業開発……99
⑦　2021 年度最終成果発表会……101
⑧　その他の取り組み……104

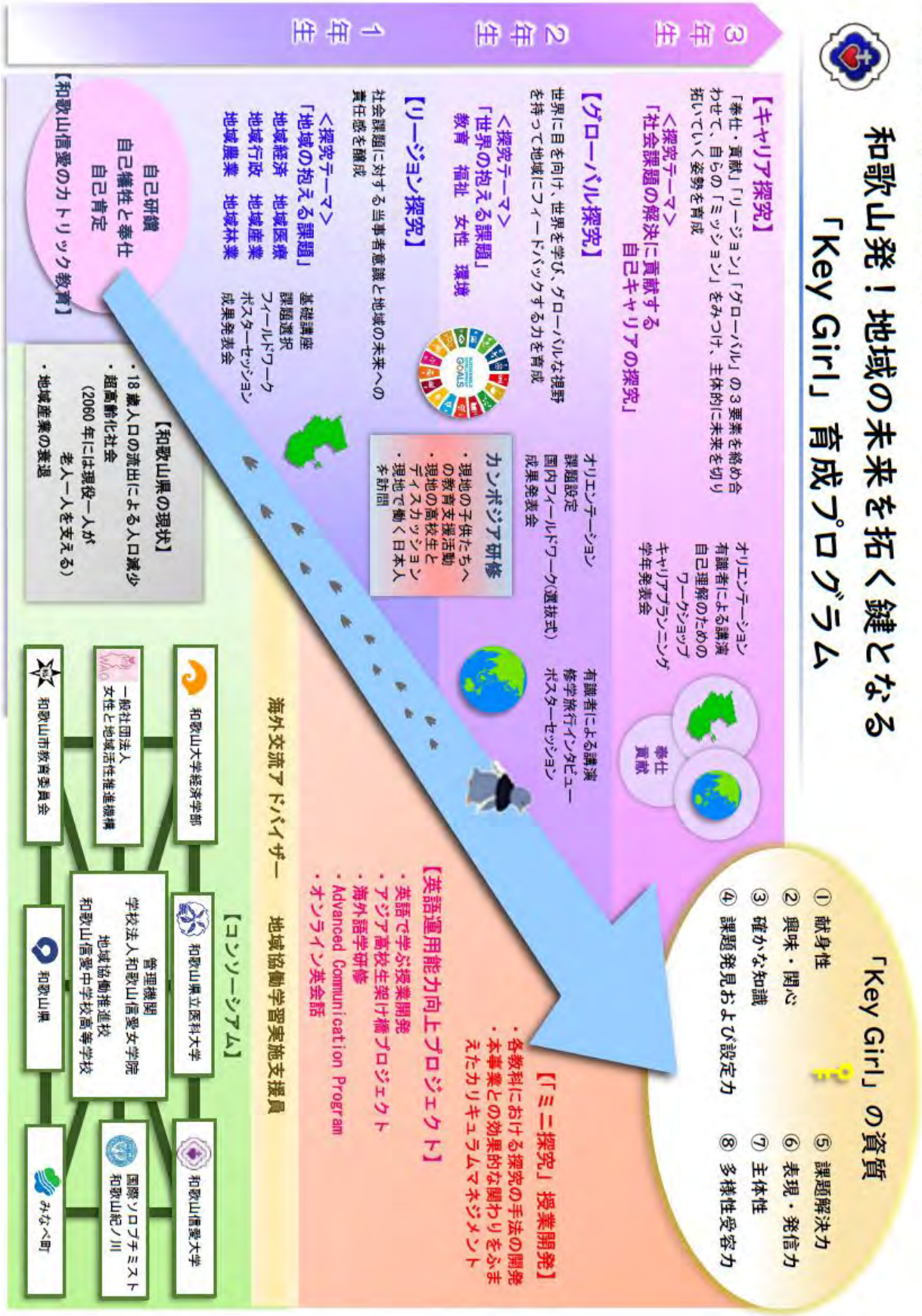
Ⅲ　コンソーシアム運営会議報告
①　第 1 回コンソーシアム運営会議……140
②　第 2 回コンソーシアム運営会議……141
③　第 3 回コンソーシアム運営会議……141
④　第 4 回コンソーシアム運営会議……142

Ⅳ　運営指導委員会報告
①　第 1 回運営指導委員会……144
②　第 2 回運営指導委員会……148

Ⅴ　次年度以降の活動について……151

Ⅰ　研究開発の概要

①　研究開発の概要図



②　研究開発の概要　（2018 年度の申請時のもの）

<table>
<tr><td colspan="2">指定期間</td><td>ふりがな</td><td colspan="3">わかやましんあいちゅうがっこうこうとうがっこう</td><td rowspan="2">②所在都道府県</td><td rowspan="2">和歌山県</td></tr>
<tr><td colspan="2">2019～2021</td><td>①学校名</td><td colspan="3">和歌山信愛中学校高等学校</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="2">③対象学科名</td><td colspan="5">④対象とする生徒数</td><td colspan="2">⑤学校全体の規模</td></tr>
<tr><td>１年</td><td>２年</td><td>３年</td><td>４年</td><td>計</td><td colspan="2" rowspan="3">全日制普通科の女子校。1 学年は８学級。医進・特進・学際の３コース制。中高で 1043 名。年次進行で全生徒を対象とする。</td></tr>
<tr><td colspan="2">普通科</td><td>２３１</td><td>２６３</td><td>２４８</td><td></td><td>７４２</td></tr>
<tr><td colspan="2">（中学部）</td><td>１０４</td><td>１００</td><td>９７</td><td></td><td>３０１</td></tr>
<tr><td colspan="2">⑥研究開発構想名</td><td colspan="6">和歌山発！地域の未来を拓く鍵となる「Key Girl」育成プログラム</td></tr>
<tr><td colspan="2">⑦研究開発の概要</td><td colspan="6">地域の抱える課題を最善の解で解決に導きたいと考え、主体的に行動できる女性（Key Girl）を育成するため、「リージョン」「グローバル」「キャリア」をテーマとした探究学習プログラムを、コンソーシアム参加機関と協働しながら開発・実践する。</td></tr>
<tr><td>⑧研究開発の内容等</td><td>⑧-1 全体</td><td colspan="6">

(1) 目的・目標

若く有能な人材が都市部へと流出し続けることで、少子高齢化が加速し、様々な社会課題に悩まされるようになった和歌山県において、カトリック教育を通して己の利益に固執しない清廉さと他者の心に寄り添い、奉仕・貢献する心を身につけた本学生徒が、地域の未来を憂うコンソーシアム参加機関からの全面的支援を受け、３つの探究学習プログラムを通してグローバルな視点も有しながら、地域の未来のために主体的に行動できる女性へと成長することを目的とする。

(2) 現状の分析と研究開発の仮説

現状①本学のある和歌山県は、急速に少子高齢化が進み、このままでは 2060 年度には現役世代１人が１人の高齢者を支えるという社会構造となり、税収の減少などから行政サービス、医療、交通など生活を支える機能の維持が困難になると予測されている。そのため、次世代を担う高校生の主体的な関わりが強く求められている。

②上記のような状態を招いたのは、30 年近くに渡り和歌山県の高校卒業者の県外大学進学率が 90%近くで全国１位という状態であることが大きく関係している。地域の高等学校は有名大学への進学を競い、保護者世代も地域の未来に対して悲観的な印象を持っているのか、大都市圏にある偏差値の高い大学へ進学させることが最大の目的となっている。

③本学は建学よりカトリックの理念による人間教育に邁進してきた。1990 年代からは②の影響を受け、英語教育・理系科目の充実・二人三脚の指導が導入され、めざましい進学実績の伸びへとつなげたものの、その指導が生徒の能動的な学びを奪い、内向きの状態を招くことになってしまった。そこで、近年になって探究学習を導入したところ、生徒たちの中に主体的に将来を切り拓こうとする姿勢が見られたり、様々な外部のプログラムにチャレンジしようとしたりするなど、明らかな変容が見られはじめた。

仮説①【地域】地域の様々な機関がコンソーシアムを構成し、本学生徒と協働して、地域に貢献する人材を育成することは本地域に大きな影響を与え、産学官と地域住民とが一体となって、地域の抱える課題を解決しようとする動きへと広がりをみせる。また、これまで地域に貢献する人材の育成には関心が薄かった周辺の高等学校も地域協働推進連携校へと名乗りをあげる。

仮説②【生徒】本事業の各プログラムを通して、課題解決力や表現・発信力、主体性などの各種能力を身につけるとともに、地域の未来のために尽力する人々との協働の経験から地元との「絆」が結ばれ、将来何らかの形で地域の未来のために奉仕・貢献したいという思いを抱くようになる。

</td></tr>
</table>

	⑧-2 具体的内容	**(1) 地域との協働による探究的な学びを実現する学習の実施計画** 地域課題に取り組む「リージョン探究」、グローバルな社会課題に取り組む「グローバル探究」、これまでの探究活動の成果を踏まえ、自らの生き方を考える「キャリア探究」の３つの探究プログラムを設定し、下記の様に展開する。 Ⅰ 「リージョン探究」（高校１年生１学期～３学期） コンソーシアム参加機関の支援のもと、６つ（経済・医療・産業・行政・農業・林業）の地域課題の中から１つを選んで探究学習を行い、地域課題に対する当事者意識、地域の未来への責任感を醸成するとともに、探究活動の基礎的な手法を身につける。 なお、本プログラムでは、クラスを越えてグループを編成し、「多様性受容力」「表現・発信力」等の育成を目指す。また、課題の設定は担当講師が行う。 Ⅱ 「グローバル探究」（高校１年生３学期～高校２年生３学期） コンソーシアム参加機関の支援のもと、「SDGs」の中から本学と関連の深い４つ（教育・福祉・女性・環境）のグローバル課題の中から１つを選んで探究学習を行い、グローバルな視野を有した上で、地域にフィードバックする手法を身につける。 なお、本プログラムでは、課題設定や国内フィールドワークの作成を生徒自身が行う挑戦的な形をとることによって、「課題解決力」だけでなく「課題設定力」、困難に負けない「主体性」、交渉を成功に導く「表現・発信力」等を育成する。 Ⅲ 「キャリア探究」（高校２年生３学期～高校３年生２学期） カトリックの精神を土台とし、Ⅰ・Ⅱのプログラムを経て成長した生徒たちには、今後予測される大きな社会構造の変化に対して受け身で対応するのではなく、自ら課題を発見し、時には国籍を越えた他者とも協働しながら未来を切り拓いていく姿勢が求められる。「奉仕・貢献」「リージョン」「グローバル」の３要素を関連させながら、自らの「ミッション」を見つけた上で、キャリアプランニングを行う。 なお、本プログラムは、個人による探究学習とするが、ディスカッション等を通して、他者から刺激を受けることで、「深い学び」を実現させる。 ※ 各活動期間が重複しているが、その期間を利用し、コンソーシアム参加機関との実践を伴う発展的な活動の実現を目指す。また、２年次には、「リージョン探究」の成果を「グローバル探究」の学びで改善しながら各種の外部コンテストに応募する。 **(2) カリキュラム・マネジメントの推進体制** 本事業で育成を目指す人材像を全教職員と生徒が理解・共有した上で「総合的な探究の時間」を用いて行う本事業の学びと各教科における学びとが、目標の達成に向けて効果的であるかを、カリキュラム検討会議を実施して改善する。なお、指定終了直前の会議では、本事業の１期生の代表を本会議に参加させ、生徒の意見も反映させる。 **(3) 必要となる教育課程の特例等** 「総合的な探究の時間」を２単位（１単位増）とし、ＬＨＲと併用しながら運用する。
	⑨その他特記事項	**(1) その他の取り組み（グローカル型として）** Ⅰ 各教員による「ミニ探究」授業の開発 本事業による探究学習を補完・発展させるものとして、各教員がミニ探究授業を開発・実践する。また、教科会議の振り返りを通して、カリキュラム検討会議を実施する。 Ⅱ 「カンボジア研修」の実施 グローカル型の本事業におけるリーダー研修として実施する。本学管理機関の共同体として、カンボジアの地方で教育支援活動を行うシスターを訪問し、ボランティア活動を行うことで「学ぶことへの意識改革」「自己のキャリアに対する意識改革」を促す。 Ⅲ 「英語運用能力向上プロジェクト」 ① 「英語で学ぶ」授業開発。各教科の教員と英語科教員とが協働し、英語を学ぶのではなく、英語で学ぶ授業を共創する。 ② 「アジア高校生架け橋プロジェクト」２期生（１名）を受け入れる。 ③ 「海外語学研修」の実施（2019 年度は、カナダとオーストラリア） ④ 「Advanced Communication Program」（中学３年生は全員。高校生は希望者で実施）海外の大学生を招き、４泊５日の短期集中型プログラムを展開する。 ⑤ タブレット端末を用いた「オンライン英会話授業」の実施。（2019 年度新規実施） ※上記の取り組みを通して、卒業段階で７割の生徒を CEFR のＢ１以上とする。

③　育成を目指す人材像

1「Key Girl」とは、

・人と人を繋ぐキー（Key）パーソン

・地域の未来を拓く鍵（Key）となり

・和歌山県（紀伊）にキャンパスを構える本学に通う、女子高校生

2　資質

①献身性　②興味・関心　③確かな知識　④課題発見および設定力

⑤課題解決力　⑥表現・発信力　⑦主体性　⑧多様性受容力

④　高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者名
和歌山県	知事　仁坂　吉伸
和歌山市教育委員会	教育長　阿形　博
みなべ町	町長　小谷　芳正
公立大学法人和歌山県立医科大学	理事長・学長　宮下　和久
国立大学法人和歌山大学経済学部	学部長　藤永　博
学校法人和歌山信愛大学	※１副学長　大山　輝光
一般社団法人女性と地域活性推進機構	代表理事　堀内　智子
国際ソロプチミスト和歌山紀ノ川	会長　宮本　安津子
学校法人和歌山信愛女学院和歌山信愛中学校高等学校（推進校）	※２副校長　紙岡　智
学校法人和歌山信愛女学院（管理機関）	理事長　森田　登志子

※１　管理機関の理事長が大学の学長を兼任しているため、代表を副学長とする。

※２　管理機関の理事長が推進校の校長を兼任しているため、代表を副校長とする

⑤　海外交流アドバイザー（グローカル型のみ）・地域協働学習実施支援員

・海外交流アドバイザー

氏名	所属・職
Sr.橋本　進子	ショファイユの幼きイエズス修道会カンボジアカンポット共同体
伊東　邦将	HAPPY SMILE TOUR CEO

・地域協働学習実施支援員

氏名	所属・職
柳岡　克己	学校法人和歌山信愛女学院　学監

※　本事業の担当として、コンソーシアム参加機関との連絡、調整を担当し、管理機関において雇用する。

⑥　3カ年の実施内容、実施方法及びスケジュール

1　2019年度（指定1年目）　※実施済

重点実施項目

○ 高校1年生「リージョン探究」の完全実施

・　2018年度までのＳＧＨアソシエイトプログラム「探究基礎」を改変した「リージョン探究」の全活動を実施する。

実施項目

○ 高校2年生「グローバル探究」の一部実施と開発

・　2018年度までのＳＧＨアソシエイトプログラム「探究発展Ｉ」を改変し、次年度の完全実施に向けて、内容の妥当性・効果等を検証する。

・　国内フィールドワーク、海外フィールドワークを実施し、次年度の実施に向けて研修内容の妥当性・効果等を検証する。

・　カナダ修学旅行で実施していたグローバルインタビューが、イタリア修学旅行（2019年度から行き先が変更）でも実施可能であるかを模索する。

・　必要な評価基準（ルーブリック）を策定する。

○ 「英語で学ぶ」授業の指導法および教材開発

・　今後の基準となるモデル授業の指導案の作成と実践を行い、その後、評価・改善を行う。

○ 各教科における「ミニ探究」授業の開発・実践

・　全教員が通常の授業において「探究」の要素を含んだ1コマを開発し、実践する。

・　実施した授業は、教科会議で共有する。さらに教科主任会議において、「総合的な探究の時間」に実施する本事業の進行と連携し、大きな効果をあげることができるようにカリキュラムマネジメントを実施する。

○ その他

・　生徒、教員、保護者、コンソーシアム参加機関で、本事業の内容、成長目標を理解・共有する。

・　高校3年生「キャリア探究」の実施に向けて環境整備を行う。

・　強い興味、関心と深い学びを生徒たちに生じさせるために、学校の特性、課題研究の内容、海外研修の渡航地等で共通性の高い他校と合同研修会の実施を模索する。

・　各取り組みの成果をいかに蓄積していくかを模索する。

2　2020年度（指定2年目）　※実施済

重点実施項目

○ 高校2年生「グローバル探究」の完全実施

・　前年度部分実施を踏まえ、改善の上、実施する

・　国内フィールドワーク・海外フィールドワークは昨年度の取り組みを踏まえ、改善の上実施する。なお、海外交流アドバイザーとともにその妥当性と効果を検証し、更なる改善を行う。

実施項目

○ 高校３年生「キャリア探究」の一部実施と開発

・　2018 年度までのＳＧＨアソシエイトプログラム「探究発展Ⅱ」を改変し、次年度の完全実施に向けて、内容の妥当性・効果等を検証する。

・　ジェネリックスキルを客観的に測定するため、外部業者の測定ツールを利用する。

・　必要な評価基準（ルーブリック）を策定する。

○ 各教科による「ミニ探究」授業の開発・実践およびカリキュラムマネジメント

・　前年度の反省を踏まえ、実施した「ミニ探究」授業を改善および更なる新規実施を行う。探究活動の評価基準・方法については、各教科で策定を行う。

・　各教科の教科会議でこれまで実施してきた「ミニ探究」の授業と「総合的な探究の時間」で実施する本事業との連携を踏まえ、最大限の効果が発揮できるような授業配置を行い、教科主任会議にて共有・検討する。

○ 「英語で学ぶ」授業の指導法および教材の開発

・　アジア高校生架け橋プロジェクト第 3 期生が在籍するクラスを中心に、前年度のモデル授業をもとに、さらに拡大、実施する。

○ 英語外部検定（GTEC 等）における目標スコアの設定

・　過去２カ年の GTEC の結果を踏まえ、英語科を中心にコースごとの目標スコアを設定する。

○ 「合同カンボジア研修研究会」を幹事校として開催

・　地域協働事業（グローカル型）およびＳＧＨ等でカンボジアをフィールドとして海外研修を実施する学校を招き、それぞれの学びを共有するだけでなく、さらに深化させるための会を企画・実施する。

３　2021 年度（指定３年目）　※今年度

重点実施項目

○ 高校３年生「キャリア探究」の完全実施

・　前年度の部分実施を踏まえ、改善の上実践する。

○ 最終成果発表会の実施

・　本事業の成果を地域や他校に普及するために、外部施設を借りて発表会を実施する。

・　初年度にプレ学年として参加した現高校３年生も数名招き、本事業と大学の学びとの繋がりについても報告させる。

○ 本事業の研究完了報告書の作成

・　本年度は本事業 1 期生の卒業年度にあたるため、3 年間の事業成果を総括の上、取りまとめる。

・　公開可能な部分に関しては本学ＨＰ上に公開し、事業普及のために貢献する。

○ 指定終了後の取り組みについて

・　指定終了後の 2022 年度も本申請内容を継続できるような体制の構築を模索する。

実施項目

○ 各教科による「ミニ探究」授業の開発再開

・ 新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から ICT を用いた教育環境への移行を優先するため凍結していた「ミニ探究」授業開発を再開する。

○ 「英語で学ぶ」授業の開発再開

・ 新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から ICT を用いた教育環境への移行を優先するため凍結していた「英語で学ぶ」授業開発を再開する。

○探究活動におけるビデオ会議ツール等の利用推進

・ 今年度、新型コロナウイルスの感染拡大という突然の事態に陥り、当初予定していたプログラムの中で、学外で活動するものや、他者との対面を伴うものを実施することができなかった。本学が一気に ICT 教育の環境を整えたことで、Zoom や Google Meet などのビデオ会議ツールを用いての調査活動を推奨した。次年度の状況はまだまだ不透明であり、対面型の調査活動の方が生徒たちへの衝撃という点では大きく、効果も高いものになるという考えには変わりはないが、ビデオ会議ツールには距離を越えて調査活動を実施できるという利点もあり、次善の策としてこれらを用いることを推進する。

○新学習指導要領に対応したカリキュラムマネジメント

・ これまでの取り組みを踏まえ、次年度に控えた年次進行による次期学習指導要領へのスムーズな移行を目指し、本学独自のカリキュラム作成を完成させ、学校、保護者、生徒に周知徹底を行う。

○オンライン型探究教材の開発

・ 本事業への取り組みを通して多くの外部機関との繋がりが生まれた。その中から、コロナ禍においても活用できるオンライン型探究教材の協働開発を行う。

○ 英語外部検定（GTEC 等）について

・ 前年度設定した英語外部検定の目標スコアの達成度合いを確認の上、英語に対する学びのモチベーションの向上も含めた指導方法の改善を行う。同時に目標スコアの適宜修正を加える。

（参考）2022 年度～（指定外 1 年目以降）

重点実施項目

○ 本申請内容の本校予算（管理機関支援）による運営

・ 地域協働推進校として指定期間と変わらない運営を実施する。

○ 文部科学省による本学事業に対する評価の精査

・ 文部科学省からの事業評価を受け、一連の研究開発について、場合によってはその内容を抜本的に見直し、より成果の見込まれる手法へと改善し、実践を継続する。

実施項目

○ 次期学習指導要領に基づく指導の実践

・ 次期学習指導要領への移行期間が終了し、2022 年度より年次進行で新しい学習指導要領のも

とでの教育が実施される。編成した本学独自のカリキュラムを実践しながらも評価・改善を繰り返すことで、さらに質の高いカリキュラムへと練り上げていく。

・ これまでの地域協働推進校としての活動成果を十分に発揮し、地域の高等学校を牽引する存在となる。

⑦　目標設定シート（2021 年度報告）

	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
全校生徒数（人）			732	684	638
本事業対象生徒数			485	684	638
本事業対象外生徒数			247	0	0

１．本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）

		2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	目標値（2021年度）
a	（卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標） 推進校以外の機関が実施する課題探究プログラムに自主的に参加する生徒の数						単位：　名
	本事業対象生徒：			126	59	74	175
	本事業対象生徒以外：	38	52	0	0	0	－
	目標設定の考え方：高校3年生は難しいが、高校１、２年生の半数が自主的に参加してほしいと考え算出した						
a	（卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標） オンライン等を含んだ外部団体が主催するシンポジウムおよび講演に参加する生徒の数						単位：　名
	本事業対象生徒：			168	37	263	200
	本事業対象生徒以外：	―	32	0	0	0	－
	目標設定の考え方：高校3年生は難しいが、高校１、２年生の半数が自主的に参加してほしいと考え算出した						
a	（卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標） ローカルおよびグローバルな社会課題に関する公益性の高い大会（オンラインも含む）に自主的に参加する生徒の数						単位：　名
	本事業対象生徒：			75	22	259	175
	本事業対象生徒以外：	73	115	0	0	0	－
	目標設定の考え方：高校3年生は難しいが、高校１、２年生の半数が自主的に参加してほしいと考え算出した						
b	（高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標） 高校卒業段階で、将来地元には戻らないかもしれないが何らかの形で地元の未来のために貢献したいと考える生徒の割合						単位：　％
	本事業対象生徒：			81	88	85	90
	本事業対象生徒以外：	―	30	0	0	0	－
	目標設定の考え方：本事業を通して、全ての生徒に地元の依頼に貢献する気持ちをもってほしいと考え算出した						
b	（高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標） 高校卒業段階で、将来地元に戻り地元の未来のために貢献したいと考える生徒の割合						単位：　％
	本事業対象生徒：			56	87	84	65
	本事業対象生徒以外：	―	10	0	0	0	－
	目標設定の考え方：本事業を通して、将来多くの生徒に地元で働いてほしいと考え算出した						
b	（高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標） 高校卒業段階で自宅から通学できる地元の大学や専門学校に進学する生徒の割合						単位：　％
	本事業対象生徒：			－	39	37	35
	本事業対象生徒以外：	17	21	29	0	0	－
	目標設定の考え方：本事業を通して、地元の大学に通うという選択肢を持つようになると考え算出した						
b	（高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標） 大学卒業段階で、地域の未来のために貢献できると感じる職業に就く生徒の割合　※2026年度						単位：　％
	本事業対象生徒：			―	―	―	60
	本事業対象生徒以外：	―	―	0	0	0	―
	目標設定の考え方：本事業の効果が大学卒業後も継続していると考え算出した						
c	（その他本構想における取組の達成目標） 高校卒業段階における４技能の総合英語力がCEFRでＢ１以上の生徒の割合						単位：　％
	本事業対象生徒：			―	59	42	70
	本事業対象生徒以外：	―	24	18	0	0	―
	目標設定の考え方：本事業を通して、留学等でグローバルな視野を獲得したいと考える生徒が増えると考え算出した						

２．地域人材を育成する高校としての活動指標（アウトプット）

		2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	目標値（年度）
a 1	（地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標） 教育改革推進事業運営委員会の主催で全教員が参加するカリキュラム検討会議の実施回数						単位：　回
		―	0	1	1	3	2
	目標設定の考え方：運営指導委員会の指導・助言を反映させるため、運営指導委員会後に開催することを踏まえて算出した						
a 2	（地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標） 開発単位Ⅳ「ミニ探究」の充実および開発教材の情報を共有するための教科主任会議の回数						単位：　回
		―	0	1	0	0	8
	目標設定の考え方：「ミニ探究」は5月から開始し、8･12･3月は実施しないことを考えて算出した						
a 3	（地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標） 研究授業の実施回数（年間1回　３教科）						単位：　回
		―	1	1	1	1	1
	目標設定の考え方：研究授業は現行通りとするが、「ミニ探究」授業は日常的に参観し、学びあえる環境を作る						
b 1	（普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標） 各開発単位における発表会（動画形式を含む）の実施回数						単位：　回
		―	2	5	7	8	8
	目標設定の考え方：開発単位Ⅰ・Ⅱはポスターセッションと最終発表会の2回ずつと成果発表会の1回と合わせ、計5回とした						
b 2	（普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標） 本学ＨＰ上での本事業の活動報告を行う回数						単位：　回
		―	43	35	6	8	20
	目標設定の考え方：ＳＧＨアソシエイトプログラムにおける2018年の活動報告の回数をもとに算出した						
c新	（その他本構想における取組の具体的指標） 他のグローカル校と連携し、地域人材の育成を補助するような取り組みを行う						単位：　回
		0	0	0	1	2	2
	目標設定の考え方：2020年度に「Glocal High School Meetings2021」の協力校として活動する実績から算出した						

３．地域人材を育成する地域としての活動指標（アウトプット）

		2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	目標値（年度）
a 1	（地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指 コンソーシアム構成団体数						単位：　団体
		―	(10)	10	10	11	12
	目標設定の考え方：本事業を継続する中で、連携を申し出てくれる機関が増えると考えて算出した						
a 2	（地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指 課題研究または発展的な実践に協働する外部人材の参画状況（オンラインを含む）						単位：　人
		―	72	153	のべ438	のべ472	のべ230
	目標設定の考え方：本事業のプログラムおよび各発表会等への参加を依頼することを踏まえて算出した						
a 3	（地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指 コンソーシアム運営委員会の実施回数						単位：　回
		―	0	3	3	4	4
	目標設定の考え方：年間で前年度反省・新規参入１、カリキュラム検討・助言2、成果報告１と考え算出した						
d新	（その他本構想における取組の具体的指標） コンソーシアム参加機関等との協働のもと地域協働事業の学びを踏まえたオンライン教材の開発を行う						単位：　個
		―	0	0	0	2	2
	目標設定の考え方：株式会社マイナビとの教材開発を踏まえて算出した						

Ⅱ　具体的な研究開発内容報告

①　開発単位Ⅰ「リージョン探究」（現高校１年生対象　※４月から実施）

１　目的

地元和歌山の抱える地域課題と向き合うことによって、社会課題に対する当事者意識、地域の未来への責任感を醸成し、探究活動の基礎的な手法を身につけることを目的とする。地域の未来のために尽力するそれぞれの立場の人たちと協働することで「絆」が結ばれると同時に、人と人とを繋ぐ「Key」パーソンとしての資質が育成される。また、自己の利益だけを考えたキャリア形成ではなく、将来地元のために奉仕・貢献したいという気持ちが育まれる。

２　内容

地域が抱える「医療」「経済」「産業」「行政」「農業」「林業」という６つの分野の課題をテーマに、高校１年生を６つのグループに分けて探究学習を実施する。コンソーシアム参加機関から派遣された講師が提示した課題についてグループディスカッション、フィールドワーク、中間発表等の活動を経て、最終発表会において、最善の解決策を提案する。本探究プログラムは、グループによる協働活動とし、コースやクラスの垣根を越えたグループ編成を行う。

３　期待される成果

「Key Girl」の資質　…　①・②・③・⑤・⑥・⑦・⑧

４　新型コロナウイルスの影響

2020 年度と比較すると休校などによるスケジュール的な面での影響は非常に少なかった。しかし、対面型の活動、地域課題の現状を自らの五感で感じる機会であったフィールドワークなどの実施にあたり、内容を変更しながらの活動を余儀なくされた。なお、年間および指定最終年度における本事業の成果報告会については、当初２月 14 日（月）に外部施設を借りて対面型で実施する予定であったが、2022 年２月５日より和歌山県にまん延防止等重点措置が適用されたため急遽 Zoom ウェビナー機能を用いたオンライン形式へ変更した。詳しくは、６のｉに述べる。

５　ICT 機器の活用

昨年度より本学では iPad を１人１台所有することとなった。当初は手探りの中での使用であったが、今年度においては年度当初の段階で新型コロナウイルスにおける影響は短期間で終わるものではないと判断し、高校１年生に関しては、対面型のポスターセッションや発表会などを実施できないという前提でプログラムの変更を行った。そのため、いかに ICT 機器を上手く活用しながら、対面型と変わらない教育効果を生徒たちにもたらすかという点について、ある一定の成果を得ることができた一年となった。詳しくは８のixに述べる。

6　概要（実践）

i　年間実施内容

<table>
<tr><th>学期</th><th>回</th><th>月日</th><th>コマ数</th><th>内容</th><th>実施状況</th></tr>
<tr><td rowspan="15">1</td><td rowspan="4">①</td><td rowspan="2">4月15日（木）</td><td>1</td><td>新入生研修会（内進生）にて
「地域協働事業」および「リージョン探究」ガイダンス</td><td rowspan="3">通常実施</td></tr>
<tr><td>2</td><td>「信愛フェスタに企画を出そう」グループワーク</td></tr>
<tr><td>4月16日（金）</td><td>1</td><td>「信愛フェスタに企画を出そう」発表会</td></tr>
<tr><td>4月16日（金）</td><td>1</td><td>新入生研修会（高入生）にて
「地域協働事業」および「リージョン探究」ガイダンス</td><td>通常実施</td></tr>
<tr><td>②</td><td>4 月26日（月）</td><td>2</td><td>プレ活動（ブレーンストーミング練習）</td><td>通常実施</td></tr>
<tr><td rowspan="2">③</td><td>5月下旬</td><td>2</td><td>「リージョン探究」パネルディスカッション（体育館）</td><td>中止</td></tr>
<tr><td>5月18日（月）</td><td>2</td><td>「リージョン探究」講師による課題提示（オンライン）</td><td>代替実施</td></tr>
<tr><td>－</td><td>－</td><td>－</td><td>探究分野の選択および活動グループの編成</td><td>通常実施</td></tr>
<tr><td>④</td><td>5月31日（月）</td><td>2</td><td>グループワーク①　アイスブレイク</td><td>通常実施</td></tr>
<tr><td>⑤</td><td>6月14日（月）</td><td>2</td><td>グループワーク②　解決策のアイディア出し</td><td>通常実施</td></tr>
<tr><td>⑥</td><td>7月12日（月）</td><td>2</td><td>グループワーク③　フィールドワークに向けての準備
※原則、生徒は校外での調査活動を行わない</td><td>変更実施</td></tr>
<tr><td rowspan="3">⑦</td><td>7月中旬</td><td>6</td><td>フィールドワーク</td><td>中止</td></tr>
<tr><td>7月下旬</td><td>2</td><td>グループワーク④　フィールドワークの振り返り</td><td>中止</td></tr>
<tr><td>7 月15日（木）</td><td>6</td><td>各種フィールドワーク
「地域医療」… 和歌山県立医科大学、すさみ病院（オンライン）
「地域経済」… 湯浅町伝統建築地区（現地訪問）
「地域産業」… みなべ町うめ課（オンライン）
「地域行政」… 和歌山市役所、ぶらくり丁等（一部現地訪問）
「地域農業」… 桃山町、有田川町農業関連施設（オンライン）
「地域林業」… 田辺市林業現場等（現地訪問）
※一部分野は担当教員が事前に現地を訪問し、フィールドワーク動画を作成</td><td>代替実施</td></tr>
<tr><td colspan="2"></td><td>グループワーク④　フィールドワークの振り返り</td><td>変更実施</td></tr>
<tr><td>夏休み</td><td>－</td><td>夏期休暇中</td><td>－</td><td>自主的な活動を推奨
※新型コロナウイルスへの感染予防を徹底した上で実施</td><td>変更実施</td></tr>
</table>

学期	回	月日	コマ数	内容	実施状況
2	⑧	9月6日（月）	2	グループワーク⑤　中間発表のアウトラインを考える ※昨年度同様、動画による発表	変更実施
	⑨	9月13日（月）	2	グループワーク⑥　中間発表資料作成	変更実施
	⑩	10月4日（月）	2	グループワーク⑦　中間発表用ポスターおよび発表原稿の作成	変更実施
	⑪	10月11日（月）	2	グループワーク⑧　中間発表動画の撮影	変更実施
	–	10月中旬	2	ポスターセッション（体育館・口頭発表）	中止
		10月18日（月）	2	動画による中間発表（オンライン） ・GoogleMeetを用いて分野ごとに実施 ・各分野講師も参加の上、アドバイスおよび評価の実施 ・本学独自の発表用ルーブリックを用いて評価 ・生徒も動画を視聴の上、評価活動を実施	変更実施
	⑫	10月25日（月）	2	グループワーク⑨　中間発表からのブラッシュアップ活動	通常実施
	⑬	11月8日（月）	2	グループワーク⑩　最終発表用資料作成および発表原稿の作成 ※最終発表はオンラインによる口頭発表形式で実施	通常実施
	⑭	12月6日（水）	2	グループワーク⑪　最終発表会に向けての発表練習	変更実施
	⑮	12月中旬	8	最終発表会（ホール・口頭発表）	中止
		12月13日（月） 12月14日（火）	4 4	最終発表会（オンライン・口頭発表） ・GoogleMeetを用い、全分野の発表を全生徒が視聴 ・質疑応答の実施（ロイロノート for Schoolの提出箱に質問を提出。その中から教員が選択し、代わりに質問の実施） ・本学独自の発表用ルーブリックを用いて評価活動の実施 ・各分野講師にも参加を依頼、評価・講評の実施	変更実施
	⑯	12月15日（水）	1	「リージョン探究」リフレクション ・ルーブリック評価表を用いて、評価活動（自己、他者）	通常実施
	–	–	–	「リージョン探究」レポート作成 ※12月19日（月）を提出期限とし、Classi上に提出	変更実施

3	⑰	2月中旬	3	最終成果発表会 ・和歌山城ホールにて各分野の優秀班のみが口頭発表	中止
		2月14日（月）	3	最終成果発表会（オンライン・ホールより配信） ・Zoomウェビナー機能を用いてオンラインにて実施 ・各分野の優秀班１班が口頭発表 ・オンラインでの質疑応答の実施 ・他のグローカル型校、地域の学校からの参加を募る ・ここまで参加してくださった地域の方々にも告知 ・文部科学省担当官による視察	変更実施

※３学期は自主的な活動の期間としており、「Glocal High School Meetings 2022」にも1班が参加

ii　担当講師および提示課題

医療 ： 和歌山県立医科大学　上野雅巳先生

〔課題〕 ①和歌山県における医師偏在、診療科偏在をどのように解決するか

②和歌山県民が平均寿命、健康寿命を延ばすために必要なことは

経済 ： 和歌山大学　足立基浩先生

〔課題〕 With コロナの時代に観光で地域経済を活性化させるには

産業 ： みなべ町うめ課　中野愛理先生

〔課題〕 みなべ町の梅産業全体として働き手を確保するには

行政 ： 和歌山市都市再生課 まちなか再生班　中村英人先生

〔課題〕 ①道路や広場、公園などの公共空間をどのように使えば賑わいが生まれるか

②あなたが行ってみたいと思う公共空間とは

農業 ： 和歌山県農林水産部農林水産政策局　庄司統弘先生

〔課題〕 和歌山県の農業をどのようにして活性化するか

林業 ： 和歌山県森林・林業局 林業振興課　石橋寛紀先生

〔課題〕 現在の若者が、林業への関心を持ち、実際に働いてもらうためにはどのような取り組みが必要か

7　評価

i　評価方法

各担当講師から提示された地域の抱える課題に対する「最善の解」の提案に向けて、主体的かつ協働的に探究学習に取り組んだ経緯をプログラム終了後に、「S（大変優れている）・A（優れている）・B（改善を必要とする）・C（努力を必要とする）」の４段階からなる本学独自のルーブリック評価表（表１）を用いて評価を行った。なお、本ルーブリック評価表は、「リージョン探究」のスタート段階で生徒に配布し、評価基準を明確化するとともに、目指すべき目標としている。また、評価は自己および他者（グループのメンバー）、そして担当教員から実施し、より多面的かつ客観的なものとなるようにしている。

また、発表に関しても、アドバイスシートに付属したルーブリック評価表（表２）を用いて、各分野の講師、生徒、教員、コンソーシアム参加機関、など複数の視点から評価を行うようにしている。

ii　ルーブリック評価表

（表１）

2021年度和歌山信愛高等学校「リージョン探究」ルーブリック評価表

	姿勢		探究	コミュニケーション	
	献身性・主体性	興味関心	課題解決力	表現力・発信力（他者へ）	多様性受容力（他者から）
S	グループのリーダー的存在として自らの役割や責任を果たすだけでなく、活動を通して進んで地域の未来のために貢献しようとする強い意志が感じられた。	地域の方々の危機意識からスタートした活動であるが、強い好奇心とともに深い探究が行われ、未来の地域のあり方に強い興味関心を持つようになった。	充実した調査を通して得た資料やデータを踏まえ、十分な論拠とともに独創的な解決策を提案することができた。	他者に対して様々な方法・手段を駆使して分かりやすく伝えることができただけでなく、意見の異なる相手からも理解を得ることができた。	自らと考えや価値観が異なる人とも自分から積極的に交流し、自らにない価値観を受け入れるなど相互理解を通して質の高い成果につなげることができた。
A	グループの一員として自らの役割や責任を果たした経験から、将来地域の未来のために貢献したいという思いを抱くに至った。	地域の方々の危機意識からスタートした活動であるが、深い探究を行おうと積極的に取り組んだことで、未来の地域のあり方に興味関心を持つようになった。	熱心な調査を通して得た資料やデータを解釈して、解決策を提案することができたが、ありふれた内容に留まってしまった。	他者に対して常に分かりやすく伝えようとし、意見の異なる相手からも理解を得ようと工夫することができた。	自らと考えや価値観の異なる人のことも尊重し、探究活動がより意義あるものとなるように協働することができた。
B	与えられた自らの役割は果たしたが常に受動的で、地域の未来のために貢献するという生き方に価値を見いだすことができなかった。	地域の方々の危機意識からのスタートであったため、積極的に探究活動に取り組むことができず、興味関心を広げることができなかった。	独自の解決策を提案することができたが、資料やデータ等を活用しておらず、論拠に乏しいものとなってしまった。	他者に対して自らの思いを伝えようとする気持ちはあるものの、伝わらないもどかしさから感情的になる場面が多く見られた。	自らと考えや価値観の異なる他者の存在に気付くことはできたが、自らの考えを押し通そうとする場面が多く見られた。
C	グループの一員としての役割も果たそうとせず常に消極的で、地域の未来のために貢献することへの価値を全く見出すことができなかった。	地域の方々の危機意識からのスタートであったため、興味関心を持つ意義を全く見出すことができず、探究活動を他のメンバーに任せきりであった。	調べた資料やデータ等をただ提示しただけであった。もしくは、解決策を提案することができていない。	そもそも他者に思いを伝えようとする気持ちに乏しい。もしくは他者に思いを伝えることができなかった。	自らと考えや価値観の異なる他者の存在を認めることができず、自分の考えに固執していた。もしくは、協力しあうことを放棄するなど協調性に欠けた。

（表２）

【発表に関するルーブリック評価表】

S	説得力があり、内容の理解を助ける発表資料とともに、声量やスピード、視線など聞き手への配慮もなされるなど発表の姿勢もすばらしかった
A①	発表資料に秀でたものが感じられる発表であった
A②	発表の姿勢に秀でたものが感じられる発表であった
B①	発表資料に改善の必要性が感じられる発表であった
B②	発表の姿勢に改善の必要性が感じられる発表であった
C	発表資料に説得力が乏しく、発表の姿勢にも大きな改善が必要な発表であった

【内容に関するルーブリック評価表】

S	丁寧な調べ学習の成果を踏まえ、独創性のある実現可能な課題解決策を提示することができた
A	課題解決策の着眼点などにはおもしろさが感じられたが、具体性や実現性には課題が残った
B	課題解決策が一般的なものであったり、調べ不足であったりして物足りなさが感じられた
C	提示された課題について調べたことをただ発表しているだけであった

※①は資料作成、②は発表の様子に評価の軸を置いたものとなっている。

８　成果　　※文中の【　　】は、本開発単位終了後の生徒レポートから引用

本開発単位は初年度から数えて 3 度目の実施となり、その都度改良を加えながら実践している。そんな中で、今年度の大きな特徴は、新型コロナウイルスの感染拡大を恐れ、活動を縮小した昨年度と異なり、新型コロナウイルスの影響を受け入れ、コロナ以前の教育効果を目指した点にある。特に、Key Girl の８つの資質の１つである「表現・発信力」の育成において、フィールドワークにおける地域の方々との交流や、各種発表会での発表や質疑応答の機会を奪われることは大きな痛手であったが、担当教員による模索を通して、コロナ禍における発表会の形式が確立されたことは大きな成果であると考えている。

それでは、まず以下に、本開発単位で育成したい資質における成果について昨年度と対比しながら述べていきたい。

ⅰ　資質①「献身性」

本開発単位終了後に実施したアンケートでは、「リージョン探究」を通して「献身性」の向上を実感した生徒が 67.8%となっており、昨年度と比較して大きな変化は見られなかった。

		2021年度	2020年度
献身性	向上した	67.8%	68.0%
	向上していない	2.4%	2.5%
	分からない	29.8%	29.5%

昨年度の報告書でも述べたが、本学はカトリックミッションスクールであり、週に 1 コマ「宗教」という授業が設定されているだけでなく、日々のお祈りや聖母祭、物故者追悼ミサ、クリスマスミサなどの各種宗教行事、また、教室やトイレなどの学校施設を生徒たち自身が毎日清掃するという伝統もあり、日々の学校生活の中でも「献身性」を育んでいるため、本開発単位の活動を通して「献身性」が向上したとは考えにくいのだろう。しかし、レポートの中には【和歌山の課題について 1 年近く取り組み、地域のために活動するということの充実感を味わうことができた。今後は、自分自身の目でも地域を見つめ、貢献できるようになりたいと思う：医療】、【最初はこの「リージョン探究」に何の意味があるのだろうかと思ったが、活動を通して自分たちの生活する地域に対してもっと「当事者意識」を持つべきだという最初のガイダンスでの言葉が今では納得できる。これまでは、自分の生活している地域について何の知識もなかったし、今後に向けて解決していかなければならない課題がたくさんあることも知らなかった。誰かがやってくれるではなく、自分がその一部分でもいいから携わりたいという気持ちが芽生えたと思う：農業】などという意見が見られ、本開発単位における活動が、「奉仕・貢献」の意識につながっていることが確認できる。

ⅱ　資質②「興味・関心」

昨年度と比較すると若干数値は下がっているものの、今年度も多くの生徒が資質の向上を実感した項目となっている。

		2021年度	2020年度
興味・関心	向上した	90.3%	91.5%
	向上していない	2.9%	1.0%
	分からない	6.8%	7.5%

生徒のレポートからも、【私たちは今回和歌山市内の商店街について調べてみた。これまでシャッター通りとなっている姿しか見たことがなかったが、かつてはとてもにぎわっていたことを初めて知った。今回の「リージョン探究」ではそこまで踏み込むことはできなかったが、なぜこのような状態になっているのか。今後どうしていくことがここに住む私たちにとって幸せなことなのかという

点にとても興味を感じており、今後も取り組んでみたいと思うようになった：経済】、【私は「地域林業」を選択したが、今回の「リージョン探究」では最終発表会で全ての班の発表を見ることができたことがとてもよかったと思う。他の分野にも様々な課題があるということは、学年全体で取り組んだ６つの分野以外にもきっと課題はあるはずだ。これから「グローバル探究」に進み、世界の課題について学びを深めていくことになるが、自分が将来取り組みたいと思う「何か」に出会えるのはないかとわくわくしている：林業】など、本開発単位の学びを通して「（社会課題に対する）興味・関心」が育成されたことが確認できる。

ⅲ　資質③「確かな知識」

アンケートの結果からは90.9％の生徒が「確かな知識」の向上を実感しているという結果が見られた。また、向上していないと答えた生徒が１名もいなかったことは大きな成果であると考えている。

		2021年度	2020年度
確かな知識	向上した	90.9%	86.0%
	向上していない	0.0%	2.0%
	分からない	9.1%	12.0%

生徒のレポートからも、【農業などの分野では後継者不足が問題になっているということは何となく知っていたが、今回梅産業の問題に取り組んだことで、それがいかに深刻なものかということを知ったように思う。また、収穫期が異なる他の作物の農家と連携して対応とする新たな試みなどについても知ることができた。やはり、様々な情報を受け身で何となく聞いているのはなく、「自ら探す」ということに価値があるということを実感できた：産業】、【これまでもインターネットで調べることが正しいとは限らないという話は聞いたことがあるが、正直そっちの方が便利だしと思っていた。しかし、今回の「リージョン探究」を通して自分たちで調べることの大切さを学んだ。ネット上のデータは少し古いものも多く、リアルな「今」とは異なっていることもあるということを体感できた：行政】などと、こちらの「確かな」という言葉の意味をしっかり理解した上で探究活動を行っている姿を確認することができた。

ⅳ　資質⑤「課題解決力」

「Key Girl」として育成を目指す８つの資質の中で比較的数字が伸び悩む項目の１つがこの「課題解決力」である。今年度も昨年度と同様、数値には伸び悩みが見られた。

		2021年度	2020年度
課題解決力	向上した	75.5%	77.5%
	向上していない	3.4%	3.5%
	分からない	21.1%	19.0%

生徒のレポートからは、【自分たちなりに色々考えた上で発表した解決策が、講師の先生からも評価をしていただけたので、自分なりには向上したのではないかと感じている：経済】、【中間発表でもらったアドバイスを参考にして最終発表に臨んだことで自分たちなりにも達成感を得ることができた：林業】と他者からの評価が向上の実感につながると同時に、【他の班の発表を見て、自分たちの班の解決策はまだまだ浅いものだと感じた：産業】、【自分たちなりに色々と考えて出した解決策だったが、すでに他の地域で実践されているものだった。なかなか新たな視点から解決策を考えるのは難しいと感じた：農業】などと、他との比較が向上の実感を阻害している例も見られた。また、【色々グループで議論して解決策を考えたので「向上した」と言いたいが、私たちのアイディアが実際に採用されているわけでもないので、「向上した」と答えるのはちょっと違うと感じた：行政】と「謙虚

さ」のような感情が「向上した」と答えることへのためらいにつながっているのではないかという意見も散見されている。

v　資質⑥「表現・発信力」

昨年度と比較して、今年度一番の伸びが見られたのがこの項目である。

		2021年度	2020年度
表現・発信力	向上した	76.0%	71.5%
	向上していない	6.3%	8.0%
	分からない	17.7%	20.5%

レポートからは、これまで通り【私は人前で自分の意見を言ったり、発表したりすることが苦手なので、このような活動は苦しいものでした：産業】のように大人しい性格の生徒にとってはなかなか苦しいものであることがうかがい知れるが、【最終発表ではしっかり準備をしていたので、堂々と発表することができた。中間発表は動画だったので正直緊張したが、とてもよい経験になったと思う：医療】、【中間発表で他の班の発表を見たことを活かし、最終発表ではより見やすい資料を作成することができたと思う。話すことだけではなく、相手に伝えるためには資料作成も大切だということを強く感じた：農業】などという意見が見られた。

また、新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から昨年度は質疑応答を行わなかったが、「表現・発信力」の向上には、瞬間的な対応も大切であろうと考え、最終発表会および最終成果発表会においては「ロイロノート・スクール」を用いた質疑応答を実践した。【最終発表会で質問を入力したら、自分の質問が選ばれた。「発表の質をより向上させるのはよい質問だ」と聞いたことがあるので、それは自分にとってとてもうれしい経験となった：医療】、【最終発表会では、質問に対して対応しなければならなかった。他の発表では難しい質問をされている班もあり、自分たちにも難しい質問が飛んできたらどうしようととても不安だった。しかし、たまたま私が調べていたことに対しての質問で、自分が代表してしっかりと対応できたと思う。それは自信になった：経済】などという意見があり、やはり「質疑応答」が生徒たちの「表現・発信力」の向上の実感につながることも確認できている。

vi　資質⑦「主体性」

かつての本学における一番の課題がこの「主体性」であった。しかし、2015 年から探究学習を導入したことによって、生徒たちの変容を最も強く感じるのがこの「主体性」でもある。

		2021年度	2020年度
主体性	向上した	69.2%	69.0%
	向上していない	4.8%	8.0%
	分からない	26.0%	23.0%

しかし、その反面、「主体性が向上した」と回答した生徒が、昨年度は 69.0%、今年度も 69.2%と、運営側の想定ほどには生徒たちの実感へとつながっていないようである。そのため、レポートを見てみると、次のような意見が散見された。【「リージョン探究」の活動を通して、同じグループの人が大きく変わったような気がする。最初は大人しそうな人だなと思っていたのに、活動を通してとてもいきいきとした人というように印象が大きく変わった。グループでの議論、発表などすごいなと感じることがたくさんあり、このような人が「主体性のある人」なのだなあと痛感した：医療】、【同じ学年なのに、積極的に行動したり、堂々と発表したりとすごい人がたくさんいて圧倒された 1 年だった。自分もそうなりたいという思いはあるが、なかなか行動に移すことができていない：行政】と、主体性に富んだ生徒と比較することが生徒の実感の

ハードルも上げることにもつながっている現状を確認することができた。

なお同時に、【私たちの班は、農業の活性化のために、和歌山県の特産品の１つである「みかん」に着目した。みかんの販売だけでは冬場だけになってしまうため、通年で販売でき、目玉になるような商品を作りたいと「みかんジャム」を作ることにした。今振り返って自分たちの活動を評価できるのは、実際に「みかんジャム」を作成したことである。他の土地でも「みかんジャム」は販売されているかもしれないが、自分たちで試作したということには価値があると思う：農業】などという意見もあり、向上の実感には至らなくとも、「主体性」の伸びが感じられる意見は多数見られている。

vii　資質⑧「多様性受容力」

「リージョン探究」において比較的高い数値が出るのがこの項目である。本開発単位の活動の特徴の１つにコースやクラスの垣根を取り払った探究グループの編成があげられるが、これは、本学が「医進」「特進」「学際」という３コース制であること、中学校から進級する「内進生」、高等学校から入学する「高入生」、また、ソフトテニス、バスケットボールなど全国大会常連クラブの生徒が在籍するスポーツクラスと多様な生徒が在籍しているという環境を逆手にとったものである。そのため、【中学校からあまりクラス替えのない環境で過ごしてきた自分にとって、「リージョン探究」におけるグループ活動は非常に衝撃的だった。学校のなかにも様々な考え方があることを知ることはできたのはよかったと思う：経済】、【最初のガイダンスで「これからの私たちは国境を越えた人たちと協働していく可能性が高い」という話を聞いたが、この「リージョン探究」を通して、何となくその意味が分かったような気がしている。同じ学校という狭い範囲の中でもこれだけ個人の意見や考え方が異なるということは、今後より広い社会の中で生活いくことは難しいことなのだと思う：産業】などと、運営側の意図をしっかり汲み取っていた生徒の姿を確認することができた。しかし、同時に【「リージョン探究」ではクラスを越えて勝手にグループが決められていた点に不満が残る。同じクラスであれば簡単に連絡も取りあえるが、違うクラスの生徒ばかりでグループを編成されると、特定の人ばかりに負担が偏ってしまう。クラブ活動で放課後や休日も自由に使えない人もいて不平等だと感じたこともあった：林業】などという意見も見られたため、このあたりについては課題が残る。

		2021年度	2020年度
多様性受容力	向上した	80.3%	82.0%
	向上していない	2.0%	2.0%
	分からない	17.7%	16.0%

viii　その他の資質

本開発単位終了後のアンケートで、「『リージョン探究』の活動を通して、向上したと感じる能力で上記に含まれていないものがあれば教えてください」という項目を実施した。以下に主なものを記載する。

・複数の視点から物事をみる力
・人の話を聞く力
・計画的に考える力
・資料を作成、編集する力
・難しいことに挑戦する力　　など

ix　本開発単位における運営面の成果

①コロナ禍における口頭発表会の形式確立

昨年度、新型コロナウイルスによって最も大きな影響を受けたのが口頭発表である。飛沫や密による感染を恐れ、中止という判断をせざるを得なかった。その代替となったのが、事前に撮影、編集した動画である。これは個人で作成したものを持ち寄り、１つの動画にすることにでき、非常に効率的ではあるが、その反面、「人前ではないので緊張感を与えることができない」、「１度の機会でいかに他者に伝えるかという力を養いたいのに、何度でも録り直しができる」などのデメリットも見られた。

また、同様の理由で質疑応答も中止することとなり、適切な質問を行う力とともに、瞬間的な対応力を養う機会も奪われることになってしまった。

そこで、今年度は、新型コロナウイルスのせいだとあきらめるのではなく、コロナ禍でもコロナ以前と同様の教育効果をもたらす口頭発表会の形式を考え、実践することを運営側の目標とした。そこで、これまでは体育館やホールなどを用い、発表者と聞き手とを同じ場所に集めていたがGsuite for Education の「GoogleMeet」を用い、聞き手は各ＨＲ教室、発表者は別の特別教室と分離することで密になることを解消した。また、発表者は発表前には消毒を行い、マスクをつけたまま発表することで飛沫による感染も防ぎ、オンラインではあるがリアルタイムでの発表会を可能にした。

さらに、株式会社 LoiLo の「ロイロノート・スクール」の提出箱機能を活用することで質問も可能にした。発表後に質問を記入し、提出する時間が必要なため、若干のタイムロスは生じてしまうものの、提出された質問の内容を教員が確認した上で質問者を指名できるというメリットも判明した。質問の質も保証できるというのは、従来の口頭発表会にもなかったメリットである。

②次年度以降の「総合的な探究の時間」の運営

本事業における３年間だけでなく、SGH アソシエイトとしての５年間の取り組みを通して、特定の教員だけが探究学習に関わるのではなく、当該学年の教員全員が創意工夫をもって探究学習の運営に携わるという環境が成立した。依然として、その理解という部分においては、個人差は残るものの、「生徒の変容」および「探究学習を活用した進路確保」という２つの成果が次年度以降の「総合的な探究の時間」における本事業プログラムの継続という結論につながっている。

9　事後アンケートの集約

８でも述べた通り、本開発単位の終了後に、学びの効果を測定するためアンケートを実施した。上記に含まれなかった項目を以下にまとめる。

〇質問項目

①「リージョン探究」の学びを通して、将来「（現在自らが生活する）地域」で地域の未来のために貢献したいという思いが強くなった。

	2021年度	2020年度
当てはまる	83.6%	86.5%
当てはまらない	16.4%	13.5%

②「リージョン探究」の学びを通して、将来他地域や他国で生活することになったとしても、何らかの形で「(現在自らが生活する）地域」の未来のために貢献したいという気持ちが強くなった。

	2021年度	2020年度
当てはまる	88.5%	85.0%
当てはまらない	11.5%	15.0%

③「リージョン探究」の学びを通して、これからの社会を生きていく上では、「答えが一つとは限らない課題」と向き合っていく必要があると感じるようになった。

	2021年度	2020年度
当てはまる	98.1%	98.0%
当てはまらない	1.9%	2.0%

④「リージョン探究」の学びを通して、英語を学ぶことの重要性を感じるようになった。

	2021年度	2020年度
当てはまる	71.0%	66.0%
当てはまらない	29.0%	34.0%

⑤「リージョン探究」の学びを通して、自分には良いところがあると感じることができるようになった。

	2021年度	2020年度
当てはまる	61.5%	70.0%
当てはまらない	38.5%	30.0%

⑥「リージョン探究」の学びに対する自らの姿勢に対して自己評価をしてください。

		2021年度	2020年度
S	楽しみながら積極的に取り組むことができた	20.3%	43.5%
A	積極的に取り組むことができた	57.5%	38.5%
B	あまり積極的に取り組むことができなかった	21.7%	15.5%
C	消極的にしか取り組むことができなかった	0.5%	2.5%

10　昨年度の課題とその対応

最終年度となる３年目の今年度は、コロナ禍への対応という部分で大きな成果をあげることができたと認識しているが、昨年度の本報告書で挙げた課題がいかに克服されたかについては検証しておきたい。

ⅰ　「探究の深み」と「発展的活動」の不足

各種の発表会などに参加し、本校の生徒の発表と他校の発表と比較すると本学生徒の「探究の深

み」の不足が気になった。そこで、今年度の運営を行うにあたり、生徒の探究活動をより深いものにしていくために、教員がどの程度関わるのかという議論を行った。その結果、やはり本学が探究学習を行うにあたって大切にしたいのは、「教員はあくまでも伴走者であるべき」ということだった。教員が関わりすぎるとそれは生徒の探究ではなくなってしまう。たとえ低学年段階で探究の質が浅くなり、各種の発表会で表彰されなくても、生徒が先輩や他校の生徒の発表を通して自分たちで気づき、深めていくことこそ本物の探究であると考え、手を出したくてもぐっと我慢するという指導を行った。今年度の締めくくりとして、3年間の成果を地域へと発信する最終成果発表会を行い、高校1年生から大学1回生までの代表生徒が登壇したが、明らかに学年による成長が見られたため、本指定の終了後も本学らしく、地道にコツコツと取り組んでいきたいと思っている。

また、「リージョン探究」では1月から3月を発展的活動の期間とし、「リージョン探究」の学びをアクションなどにつなげてほしいと考えていたが、こちらの方は昨年度と同様、新型コロナウイルスの影響があり、学外での積極的な活動をなかなか奨励することができず、今年度も低迷してしまったように思う。この問題の解決には「社会状況」も大きく関わってくるため、もう少し長い目で対応していきたいと思う。

ⅱ　「表現・発信力」の育成

すでに述べた通り、昨年度は新型コロナウイルスに対する正しい知識にも乏しく活動が消極的になってしまった。そのために、口頭発表や質疑応答を行うことができず、録画形式の発表となったことで画像の後ろで原稿を見ながら読むことも可能となり、聞き手に対して思いや熱意を届けるという活動を行うことができず、本来想定していた形で「発信・表現力」の育成を行うことができなかった。そのため、今年度の運営では、その改善を優先し、8－ⅸの②に報告した形で対応することができた。

ⅲ　客観的かつ適切な評価活動の実施

本学では、7－ⅱ表1にて紹介した「S」「A」「B」「C」の4段階からなるルーブリック評価表を用いて自己評価、グループメンバーおよび担当教員からの他者評価を実施している。しかし、他者評価において、今後の人間関係などへの配慮からどうしても無難な評価をせざるを得ないという意見が届いていた。

そこで、今年度はガイダンスや中間発表などの連絡や、最終発表後に実施したアンケートを通して、本当の意味で他者を育てる適切な評価の大切さを訴えかけた。どの程度の効果があったかは定かではないが、これも継続することで客観的かつ適切な評価活動につながっていくと考えている。

なお、以下に、最終発表後に実施したアンケートの結果を述べる。

	2021年度
相手のことを考え、客観的かつ適切な評価やアドバイスができた	72.5%
もう少し厳しい評価やアドバイスを行いたかったが、相手の感情が気になり、甘いものになってしまった	25.6%
評価をしなければならなかったため行っただけで、適切なものではない	1.9%

11　「リージョン探究」プレゼンテーション資料（一部）

白崎海洋公園における観光客減少問題

1班
川端佐保　西村真里奈　下地柚華
出口莉子　坂本桃々夏　南真由里

目次

①解決策について

1.白崎海洋公園を研究テーマに選んだ理由

2.白崎海洋公園の問題点

3.私たちの考えた解決策

4.解決策の効果

5.コストについて

②宣伝方法と資金源について

最後に…まとめ

①-1．白崎海洋公園を研究テーマに選んだ理由

- 海が綺麗

- 美味しい食べ物がたくさんある

実際の観光客の人数

宿泊客				
	令和元年	令和2年	前年差	前年比
観光客計	121.734	96.507	25.227	79.28%
外国人	893	88	805	9.85%
日帰り客				
	令和元年	令和2年	前年差	前年比
観光客計	765.975	614.353	151.622	80.21%

https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/062400/doutai2_d/fil/R01_doutaityousa.pdf

①-2．白崎海洋公園の問題点について

- 交通の便が悪い
- 白浜に行く途中にあるので見過ごされがち
- 知名度が低い

①-3-1．解決策

白崎海洋公園内のキャンプ場を開発する

①-3-2．解決策　理由

- 今すでにあるキャンプ場を活用できる
  → コスト削減

①-3-3.キャンプ場を発展させるためには

①しおりの作成

②レンタル用品の充実

③コインシャワーの新設

④コテージの新設

①-3-4.さらに…

③最大宿泊可能組数は約20組
→ 初期段階では半数の10室で充分

④現在コテージは2棟
→ コスト面を考慮すると2棟の新設が妥当

①-4-1．解決策の結果：茨城県で行われた取り組み

キャンプの参加者へのその地域ならではの食材を使ったキャンプ飯やそのキャンプ飯の食材を買うことができるお店の紹介を載せたしおりの事前配布
→ 県内の食材の購入率UP↑

https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000096.000007764.html

県内での食材購入率
43.3%→96%
（キャンプ場売店での購入含む）

①-4-2キャンプ飯

＜金山寺みその肉キャベツ＞

『材料』(2～3人)

- 豚小間切れ
- キャベツ(芯は抜く)
- オリーブオイル大さじ1
- 金山寺みそ
- 片栗粉
- 水150cc

『作り方』

①オリーブオイルを熱したフライパンに入れ、金山寺みそを投入し、混ぜ合わせる。

② ①に豚小間切れを投入し、赤いところが消えるまで混ぜる。

③一度火を止めて、キャベツを適当な大きさにちぎり入れる。

④再び火を付けて③が炒まったら水150ccを混ぜて、水分を飛ばす

⑤水50ccで溶いた片栗粉を回し入れ、混ぜてとろみが出たら完成！

https://cookpad.com/recipe/2304285　https://www.photolibrary.jp/

①-4-3キャンプ飯の食材の購入場所

檜屋

住所：日高郡由良町門前554-3
電話番号：0738-65-3007
営業時間：10：00～19：00
定休日：水曜日　不定休
金山寺みその価格：600円(250g)

阪和自動車道湯浅御坊道路広川ICから20分

https://wakayama-hidaka-history.jp/introduce/日高発祥ブランド%E3%80%80金山寺味噌「金山寺味噌」（-2/

①-5-1.コストについて

＊レンタル用品の充実	約15万×10円
＊コインシャワーの新設	約30万×10円
＊コテージの新設	約260万×2円
＊広告等の印刷費用	約1万円
合計額	**約969万円**

参考元https:/teddy boy8.com /

①-5-2.一からキャンプ場を作る場合

①土地費用が200万～3000万円必要

②コテージやコインシャワー等の
建設費用に約1000万円程度必要

コストが2倍近くに！

参考元　https://taxtech.co.jp/starter/retire-camp_management/

②-1. 宣伝方法と資金源について

クラウドファンディングの利用

メリット

内容を重視した記事が書けるため、クラウドファンディング自体が宣伝として利用できる。

実際に、**もしクラウドファンディングをしたら、**という体で、記事を書いてみました！

はじめに・ご挨拶

初めまして、和歌山信愛高等学校に通っている一年生6人です。

私たちの活動目的は、"日本のエーゲ海"とも呼ばれる絶景「白崎海洋公園」の魅力を県内に、そして県外の方にも知っていただくことです。

ここ数年、猛威を振るっている新型コロナウィルス。

そんな中で、なかなか今まで通りにショッピングモールや遊園地などには行きにくくなってしまたのではないでしょうか。

そこで！和歌山の白崎海洋公園で、大自然に囲まれながらコテージでグランピングはいかがですか。

Shinai K1

日本

認証していません

特定商取引法に基づく表記

メッセージで意見や質問を送る

このプロジェクトで実現したいこと

和歌山県由良町にある白崎海洋公園。

純白の石灰岩が美しい、まるで異国のような絶景。

しかし、毎年観光客は減り続けています。

このプロジェクトは、All-or-Nothing方式です。
目標金額を達成した場合にのみ、**2022/05/15 23:59:59**までに集まった金額がファンディングされます。

FAQ

Q. クレジットカードの決済はいつ行われますか？

Q. プロジェクトに関する質問はどうすればいいですか？

Q. 間違って支援した場合はどうなりますか？

そこで私たちはこのように考えました。

白崎海洋公園には隣接するキャンプ場があります。

①新しくコテージを新設する。

②数年前の台風で破壊されてしまったコインシャワーを復活させる。

これらを通じて、より多くの人々に白崎海洋公園の魅力を知ってもらい、

「もう一度来たい！」

というお声をいただけるような変化を作り出すことが目的です。

プロジェクトを立ち上げた背景

きっかけは、学校の授業「リージョン探究」で地域の活性化について調べた時に、「日本のエーゲ海」という文字に目がとまったことです。

白崎海洋公園を調べていけばいくほど、多くの魅力とその問題点に気が付いていきました。

「どうしてこんなにきれいな場所なのに、観光客数がどんどん減ってるの？」

改めて考えてみると、私たちも白崎海洋公園に行ったことが少なく、行ったことがあるとしても数回、もしくは行ったことがありませんでした。

だからこそ、私たちはもっともっと白崎海洋公園の魅力を伝えたい！そういう想いをもって、このプロジェクトを企画しました。

資金の使い道・実施スケジュール

①レンタル用品　約15万円×10セット

②コインシャワーの新設　約30万円×10部屋

③コテージの新設　約260万円×2棟

④広告などの印刷費　約1万円

⑤ラジオ広告　約50万円

リターンのご紹介

①お礼の手紙　1000円

②コインシャワーやキャンプ用品の無料貸し出し　5000円

③新設されたコテージの1泊利用　7000円

④由良町特産物の密柑、金山寺味噌、クエ　8000円

＜募集方式について＞

本プロジェクトはAll-in方式で実施します。目標金額に満たない場合も、計画を実行し、リターンをお届けします。

②-2 宣伝方法と、資金源について

リターン

「体験」をテーマ
白崎海洋公園コテージ利用
↓
体験が、愛着を持つ事に繋がるのでは。
それ以外にも、由良町の特産物である、みかん、金山寺味噌、クエなどを、投資額により変化させ、リターンとする

まとめ

白崎海洋公園を発展させるために…

①キャンプ場の再興
②クラウドファンディングを利用した
　コスト削減
③クラウドファンディングを利用した宣伝

どんなものに人は興味を寄せられるか？

温かみのある 柔らかいイメージのもの？

「木の家」

リラックス効果？？

人それぞれの性格

※どんなものとは
決めれない

林業とコラボする企業側の目標

•紀州材で作られた新商品

↓

•木の匂い、リラックス効果

↓

•売り上げ増加

流行りに乗る

• インスタグラム

• TikTok

などの最近の流行りのアプリを

使って林業を広めていく🌳

例えば木を切っている所など

企業とコラボすることによる．林業側のメリット

- 有名な企業とコラボすることで注目される
- コラボするとできることの幅が広がる
- 色々な年代のたくさんの人に知ってもらえる
- 様々な分野のことに挑戦できる

現在、実際に林業とコラボしている企画

1. サバイバルゲーム

2. 家具

トヨタと住友林業のコラボ

木製のコンセプトカー

国産材で作られている

考え

調べてみると案外コラボしているものが少なかった

→ コラボしやすそうな企業ともっとコラボすればいい！

コラボする企業

ニトリ

国産材の新ブランド
↓
新しい家具などで話題につながる
↓
林業の**活性化**

林業側の目標

企業との交流で安定した供給先を確保
→ 安定した**利益**につなげる

コラボで話題を呼び、林業を**活性化**させる
（働き手を増やす等）

企業とコラボすることの問題点

- 交渉や調整に時間がかかる
- コストがかかる

企業とのコラボ商品を通して、
紀州材というものを知ってもらう

↓

さらに紀州材や林業に触れる機会
を作って、興味を持ってもらう！

幅広い層を対象にした職業体験の機会を提供

未就学児対象(3歳程度～)

枝打ちや伐採など、林業に関わる作業をおもちゃなどを使用して遊び感覚で楽しみながら林業に興味をもってもらう。

軽い段ボールやプラスチックなどを用い、地面などの一部を木製にするなど安全に配慮したもの。接着面は面ファスナーを使用。

小学生対象(6歳程度～)

林業の現場に招いての見学や、端材、ノコギリを使用しての軽い実践的な体験などをして林業について学んでもらう。

中高生対象(13歳程度～)

小学生と同様に現場の見学、端材とチェーンソーを使用しての体験などをして林業について学んでもらう。

大学生以上対象(19歳程度から)

林業についての講習を行い知識を深め、実際に林業に従事する人を数人招いての質疑応答の時間を設けたり、伐採し、短くなった木の根本を使用しての伐採の体験などを行う。

女性でも、大型重機を操縦できる！

伐採から裁断、皮剥きまでできる重機

まとめ

- **SNSを使っての情報発信**

  流行のアプリを使って林業を宣伝。若者の目にも留めてもらう。

- **過去のコラボ内容**

  伐採予定地でのサバイバルゲームや森林でのフィットネス。
  トヨタと住友林業との企業間コラボ。

- **企業とのコラボの提案**

  ニトリとのコラボで新ブランドを作る。

② **開発単位Ⅱ「グローバル探究」**（現高校２年生対象　※ただし、昨年度高校１年生１月から実施）

１　目的

本学の目指す「Key Girl」の姿は、グローバルな視点を有しながらも地域の未来のために貢献できる人材である。「リージョン探究」では自らの住む地域にも多くの課題があることを知り、地域に対して「興味・関心」が育まれた。また、地域の方々との協働活動は「絆」となり、いつか地元に対して自らの持てる力を還元したいという郷土愛にも繋がっているはずである。しかし、自分さえよければいい、自分の身近なところだけがよければいいという考えのもとでは、一時的な解決はできても sustainable なものとは言えない。「世界」と「地域」とは相反するものではなく、世界に目を向け、世界の課題を学び、そこで獲得したグローバルな視点を用い、地域にフィードバックする力へと発展させることを目的とする。

２　内容

グローバルな視点を獲得するために、SDGs の中から４つの分野を選び、その範囲の中で探究活動を実施する。2015 年 9 月の国連サミットで採択された国連加盟 193 カ国が 2030 年までに達成する目標である SDGs は、17 の目標と 169 のターゲットから構成され、持続可能な社会を実現するために、地球上の誰一人取り残さないことを誓ったものである。

本学の礎が明治初期に文明開化の陰で置き去りにされた人々に教育と福祉を提供した 4 人のフランス人シスターにあることから「教育（目標 4：質の高い教育をみんなに）」、「福祉（目標 1：貧困をなくそう、目標 2：飢餓をゼロに、目標 3：すべての人に健康と福祉を、目標 6：安全な水とトイレを世界中に）」。また、本学がカトリックミッションの女子校であることから「女性（目標 5：ジェンダー平等を実現しよう）」。さらに、SGH アソシエイト時代より実施してきたアンケートで環境問題をテーマに探究活動を行いたいという生徒からの要望が多かったことから「環境（目標 7：エネルギーをみんなにそしてクリーンに、目標 11：住み続けられるまちづくりを、目標 12：つくる責任つかう責任、目標 13：気候変動に具体的な対策を、目標 14：海の豊かさを守ろう、目標 15：陸の豊かさも守ろう）」。以上の 4 分野を「グローバル探究」のテーマとする。

なお、本開発単位においては、「リージョン探究」よりも難易度をあげるために、テーマは設定するものの、課題に関しては生徒が独自に設定することとする。また、原則グループでの探究活動を推奨するが、どうしてもこの課題でやりたいというものがある場合は、個人での探究活動も可能とした。

さらに、フィールドワークも「自分で創るフィールドワーク」と命名し、自分たちの設定した課題の解決のために必要なフィールドワーク先を自分たちで開拓し、交渉の上、インターンシップの形で受け入れを目指す（ただし、2020 年度より新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点からオンラインによるインタビューを推奨）。

３　期待される成果

「Key Girl」の資質　…　①・②・③・④・⑤・⑥・⑦・⑧

４　新型コロナウイルスの影響

開発単位Ⅰの報告でも述べた通り、昨年度と比較するとスケジュール的な面での影響は非常に少なかった。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大を防止する観点から、各種の対面型の活動に関する制約からはどうしても逃れることができなかった。特に、次項で詳しく説明する「グローバル探究」の目玉となる活動である「自分で創るフィールドワーク」に対して自由に取り組むことができなかっ

たことは非常に残念なことであった。

5　「自分で創るフィールドワーク」

ⅰ　概要

「グローバル探究」における1つのチャレンジが「自分で創るフィールドワーク」である。東京、大阪、和歌山の3カ所を設定し、夏期休暇期間中の最低2日間インターンシップを実施し、その中で調査活動を行うこととする。なお、東京・大阪に関しては、生徒の安全を確保するため受け入れの日時など細かな条件を課す。

ⅱ　新型コロナウイルスの影響

前項でも新型コロナウイルスに関しては述べたが、東京や大阪など、基本的に学外での活動が中心となる本プログラムは、新型コロナウイルスの影響を非常に大きく受けるものである。本フィールドワークは、自ら設定した課題の解決のために、生徒自身が直接企業や各種団体などと交渉し、フィールドワーク先を確保するというチャレンジ性の高いプログラムで、生徒の主体性育成にとって大きな役割を果たすものだと認識していたが、本フィールドワークを実施することは感染拡大を助長しかねず、保護者の理解も得にくいだろうという判断のもと、今年度も当初想定した形での実施は断念した。

ⅲ　代替案

本学では、昨年度より生徒1人が1台のiPadを所有しており、現在「グローバル探究」に取り組んでいる高校2年生も iPad を所持している。そこで、「自分で創るフィールドワーク」の代替として、そのiPadを活用し、Zoomなどのオンライン会議アプリを用いて距離の壁を越えた「オンラインフィールドワーク」の実施を推奨した。もちろん、「自分で創る」の部分が大切であるため、自分たちの設定した課題の解決のために必要と考える調査を行うために、調査先の選定や交渉は全て生徒自身で行うという本開発単位のフィールドワークの中で最も重視した部分は継続した。なお、「自分で創るオンラインフィールドワーク」と名付け、期間も夏期休暇中にこだわらず、継続して実施してよいことにした。その結果、官公庁や企業、各種団体のHPの中の問い合わせ窓口や電話などを用いて積極的にコンタクトをとった生徒が多数いた。

ⅳ　「自分で創るオンラインフィールドワーク」実績

生徒たちの交渉によって、計30の企業、団体、事業所などから協力をいただき、オンラインフィールドワークを実現することができた。以下に主なものを紹介する。

環境省、和歌山県庁、和歌山県福祉サービス運営適正化委員会、和歌山県教育委員会
和歌山信愛大学、和歌山県立医科大学、金沢大学、
Yahoo！、株式会社インテリックス、ヤクルト販売株式会社、イオンモール株式会社
Save the children、法テラス日本司法支援センター、日本ケアラー協会、男女共同参画センター
など

6　概要（実践）

i　昨年（2020 年）度実施内容

学期	回	月日	コマ数	内容	実施
3	①	1月24日（月）	1	「グローバル探究」ガイダンス（オンライン） ・「リージョン探究」の振り返り ・「グローバル探究」の内容説明 ・「グローバル探究」ルーブリック評価表の配布	変更実施
	②	2月21日（月）	2	「グローバル探究」分野選択講義①（オンライン） ・「女性」「福祉」分野	変更実施
	③	3月16日（水）	2	「グローバル探究」分野選択講義②（オンライン） ・「環境」「教育」分野	変更実施

※「グローバル探究」は高校 1 年生の 1 月からスタートしている。

ii　今年度実施内容

学期	回	月日	コマ数	内容	実施
1	④	4 月26日（月）	1	「グローバル探究」ガイダンス②（オンライン） ・年間スケジュールの連絡 ・「グローバル探究」ルーブリック評価表の配布	変更実施
	⑤	5月10日（月）	1	分野選択およびグループ編成 ※ただし、個人での活動もOKとする	通常実施
	⑥	5月31日（月）	2	グループワーク① ・探究課題の設定、フィールドワーク先の選定	通常実施
	⑦	6月14日（月）	2	グループワーク② ・調査活動の開始、フィールドワーク先へのアポ取り	通常実施
	⑧	7月12日（月）	2	進捗状況報告会（オンライン） ・分野ごとに講師に進捗状況の報告。アドバイスを受ける	変更実施
	⑨	7月13日（火）	2	グループワーク③ ・講師からのアドバイスを踏まえ、ブラッシュアップ活動	通常実施
夏期休暇	－	－	－	「自分で創るフィールドワーク」	中止
	－	－	－	「自分で創るオンラインフィールドワーク」 ※ただし、今年度は夏期休暇期間外の実施も推奨した	変更実施
2	⑩	9月6日（月）	2	グループワーク④　中間発表のアウトラインの作成 ※昨年度同様、動画による発表とする	変更実施
	⑪	9月13日（月）	2	グループワーク⑤　中間発表の資料作成	変更実施
	⑫	10月4日（月）	2	グループワーク⑥　中間発表動画および発表原稿作成	変更実施

2	⑬	10月11日（月）	2	グループワーク⑦　中間発表動画の撮影	変更実施
	⑭	10月中旬	2	ポスターセッション（体育館・口頭発表）	中止
		10月18日（月）	2	動画による中間発表（オンライン） ・GoogleMeetを用いて分野ごとに実施 ・各分野講師も参加の上、アドバイスおよび評価の実施 ・本学独自の発表用ルーブリックを用いて評価 ・生徒も動画を視聴の上、評価活動の実施	変更実施
	⑮	10月25日（月）	2	グループワーク⑧　中間発表からのブラッシュアップ活動	通常実施
	⑯	11月8日（月）	2	グループワーク⑨　最終発表用資料および発表原稿の作成	通常実施
	⑰	12月16日（木） 12月17日（金）	3 3	最終発表会（対面/オンライン・口頭発表） ・各講師へはGoogleMeetを用いてオンライン配信 ・各講師による講評と評価の実施 ・体育館、ホールの2か所で３コマ×2日間で実施 ・休み時間を利用して、会場間の移動は可能 ・本学独自の発表用ルーブリックを用いて評価活動の実施 ※質疑応答の実施（質問用端末を使用）	変更実施
	⑱	12月18日（土）	1	「グローバル探究」の活動振り返り、評価活動	通常実施
	―	―	―	「グローバル探究」レポート作成 ※12月23日（木）を締切とし、Classi上で提出	通常実施

ⅲ　担当講師

本開発単位は、本年度が本格実施初年度ということもあり、「教育」「福祉」「女性」「環境」のそれぞれの分野に担当講師を選定、依頼した。

教育　：　和歌山信愛大学教育学部子ども教育学科　辻伸幸先生

福祉　：　日本赤十字社和歌山医療センター
外傷救急部/外科医/国際医療救援登録要員/国際人道法普及担当　益田充先生

女性　：　一般社団法人「女性と地域活性推進機構（WAO)」代表理事　堀内智子先生

環境　：　徳島大学　環境防災センター学術研究員　松重摩耶先生

7　グループの編成

本開発単位の２で述べた通り、本開発単位はグループ活動を推奨するものの、生徒たち自身で課題設定を行うことから、「主体性」を尊重するため、個人での探究活動も許可した。そのため、「教育」分野が 12 班、「福祉」分野が 14 班、「女性」分野が 20 班、「環境」分野が 13 班と、全４分野で 59 班のグループが編成され、６人の生徒が１人で探究活動を行うことになった。

8　評価

ⅰ　評価方法

各探究グループにおいて設定したグローバル課題に対して、「2030 年度を期限とし、持続可能な最善の解」の提案に向けて、主体的かつ協働的に探究活動に取り組んだ経緯をプログラム終了後に、「S（大変優れている）・A（優れている）・B（改善を必要とする）・C（努力を必要とする）」の 4 段階ルーブリック評価表（表 1）を用いて自己評価および相互評価、そして担当教員からの評価を行った。また、中間発表および最終発表会における発表および資料に関しては、アドバイスシートに付属したルーブリック評価表（表 2）を用いて、他者評価だけでなくアドバイスも行うこととした。

ⅱ　ルーブリック評価表

（表 1）

2021年度和歌山信愛高等学校「グローバル探究」ルーブリック評価表

	姿勢		探究		コミュニケーション	
	献身性・主体性	興味関心	課題発見力 課題設定力	課題解決力	表現力・発信力 （他者へ）	多様性受容力 （他者から）
S	グループのリーダー的存在として自らの役割や責任を果たすだけでなく、進んで他者や社会のために貢献しようとする意志が感じられた。	課題意識を持って活動をスタートし、強い好奇心とともに深い探究が行われたことで、関連する他の分野にも課題意識が広がった。	グローバル探究にふさわしい独自性に富んだ具体的な課題を設定することができた。	先行研究を踏まえ、十分な論拠とともに、独創的な考えを展開することができた。	他者に対してさまざまな手法を駆使して分かりやすく伝えることができただけでなく、意見の異なる相手からも理解を得ることができた。	自らと考えや価値観が異なる人とも自分から積極的に交流し、自らにない価値観を受け入れるなど相互理解を通して質の高い成果につなげた。
A	グループの一員として自らの役割や責任を果たした経験から、将来他者や社会のために貢献したいという思いを抱くに至った。	課題意識を持って活動をスタートし、深い探究を行おうと積極的に取り組んだことで、さらに興味関心が広がった。	グローバル探究にふさわしい具体的な課題を設定することができた。	調べた資料やデータを解釈し、自らの考えを展開することができた。	他者に対して常に分かりやすく伝えようとし、意見の異なる相手からも理解を得ようと工夫することができた。	自らと考えや価値観の異なる人のことも尊重し、活動がより意義のあるものとなるように活動することができた。
B	与えられた自らの役割は果たすが主体的なものではなく、他者や社会のために貢献するという生き方に価値を見いだすことができなかった。	課題意識を持って活動をスタートしたにも関わらず、積極的な探究を行うことができず、興味関心を広げることができなかった。	グローバル探究にはふさわしいが、漠然とした課題設定となってしまった。	独自の考えを展開しているが、調べた資料やデータを活用できておらず論拠に乏しい。	他者に思いを伝えようとする気持ちはあるが、もどかしさから感情的になることが多かった。	自らと考えや価値観の異なる他者の存在に気付くことはできたが、自らの考えにこだわることが多かった。
C	グループの一員としての役割も果たそうとせず常に消極的で、他者や社会に貢献しようとする意志も見られなかった。	他者の課題意識に追従して活動をスタートさせたため、興味関心をもつ事柄を見出せず、積極的に探究を行うこともできなかった。	グローバル探究に関連していない課題設定となってしまった。	調べた資料やデータをただ列挙しただけにとどまっている。	他者に思いを伝えようとする気持ちを持っていない。もしくは、他者に思いを伝えることができなかった。	自らと考えや価値観の異なる他者の存在を認めることができず、周囲から促されて交流をするだけだった。

（表 2）

2021年度「グローバル探究」最終発表会　ルーブリック評価および感想シート

【内容】

S	課題の設定および解決策に独創性や実現性があり、非常に興味深い内容だった。
A	課題の設定もしくは解決策の着眼点などに良さがあり、さらなる発展が期待できる内容だった。
B	課題の設定もしくは解決策が一般的なものであり、内容的にはもの足りなさが感じられた。
C	設定した課題について調べたことをただ発表しているだけであり、解決策については触れられないなど内容に乏しさが感じられた。

【発表】

S	適切な声量と話すスピードで内容を理解しやすく、聞き手のやる気や主体性まで引き出されるような発表だった。
A	適切な声量と話すスピードで内容を理解しやすく、原稿を見るのは最小限で、聞き手への配慮がなされた発表だった。
B	声量や話すスピードなどに物足りなさはあったが、聞き手に自らの成果を伝えようとする思いが感じられる発表だった。
C	聞き手に自らの成果を伝えようという意識や、ともによりよい探究活動を行おうとする意識に欠けた発表だった。

分野　　班へ	組　　より

評価	内容		発表	

発表を聞いての感想

9　成果　　※文中の【　】は、本開発単位終了後の生徒レポートから引用

本開発単位は初年度のプレ実施から数えて３度目の実施となり、例年改良を加えながら実践している。特に今年度は、昨年度とは異なり、開発単位Ｉ「リージョン探究」同様、新型コロナウイルスの影響を受け入れた上で、コロナ禍以前の教育効果を目指した点にある。特に、「自分で創るフィールドワーク」を２年連続で実施できなかった点は非常に残念であるが、昨年度の経験を踏まえ、スムーズな形で「自分で創るオンラインフィールドワーク」へと移行することができた。

また、本開発単位では、開発単位Ｉ「リージョン探究」で育まれた地域の未来に対して貢献したいという思いを、グローバルな視野と考え方を身につけることで、広い視野をもって地域に貢献できる力へと発展させることを意識するとともに「Key Girl」の８つの資質全てを育成することを目指している。

では以下に、本開発単位で期待される成果と対比させながら詳細を述べる。

ⅰ　資質①「献身性」

本開発単位終了後に実施したアンケートでは、「グローバル探究」を通して「献身性」の向上を実感した生徒が 76. 7%となっており、昨年度よりも大幅な伸びを見せている。生徒のレポートからは、【今年度私はあえて 1 人で「グローバル探究」に取り組んだ。昨年度の「リージョン探究」はグループでの活動でメンバーに頼ってしまったところがあると感じたからだ。グローバルな社会課題を持続可能な方法で解決に導くという「グローバル探究」の活動は非常に大変だったが、その活動を通して誰かのために活動することの大切さを感じることができるようになったと思う：福祉】、【「グローバル探究」では、解決策を導くにあたって、色々な方の協力を得るために積極的にコンタクトをとるという活動があった。私は環境分野を選択したが、様々な人が、このままでは地球環境は破滅してしまうという思いのもと地道に活動していることを知った。その方々の思いを通して、自分自身も何らかの形で未来の人たちが不安なく生活できる環境を取り戻すために尽力したいと思うようになった：環境】などと、「グローバル探究」の学びや活動を通して、誰かのために行動することの尊さに気付いた様子が見られた。

		2021年度	2020年度
献身性	向上した	76.7%	60.5%
	向上していない	4.0%	3.2%
	分からない	19.3%	36.3%

ⅱ　資質②「興味・関心」

昨年同様 92.6%と非常に高い割合の生徒が「(グローバルな社会課題に対する) 興味・関心」の向上の実感を述べており、成果の感じられる項目となった。

レポートからも【「グローバル探究」の良さは、自分で課題設定を行うことによって興味を感じている分野について取り組むことができる点だと思う。そのため、この 1 年間はとことん取り組むことができたと思う：教育】、【1 年という長い期間取り組んだことは大変だったが、興味や関心があることについてより深く知る機会を持つことで、さらにその課題の奥深さに気付くことができた：教育】などと、課題提示型の「リージョン探究」を経て、課題設定型の「グローバル探究」を実施するという本プログラムの展開も興味・関心の向上に繋がっていることが確認できた。

		2021年度	2020年度
興味・関心	向上した	92.6%	91.8%
	向上していない	1.3%	1.8%
	分からない	6.1%	6.4%

ⅲ　資質③「確かな知識」

本資質も昨年度より高い向上の実感を得ていたが、今年度は 95.3%とさらに伸びが見られ、成果を感じることのできる項目となった。

生徒のレポートからも、【ネットの情報を信じるなということはよく言われるが、それでもインタ

		2021年度	2020年度
確かな知識	向上した	95.3%	83.2%
	向上していない	0.7%	0.9%
	分からない	4.0%	15.9%

ーネットの手軽さは私たちにとって大きな魅力だと思う。しかし、今回学外の方々にインタビューするという少し面倒な形で調査を行う機会を持ったが、直接コンタクトをとって得た知識というものは貴重なものだと感じることができた：女性】、【自分たちも積極的に「グローバル探究」の活動に取り組んだが、今回多くの他の班の発表を聞くことができたことに価値があると感じている。学年の皆が同じような思いをして集めた様々な分野の知識を共有したことで、自分自身の教養みたいなものが豊かになったと思う：福祉】などと、「確かな知識」の「確かな」の部分をしっかりと理解した上で、その力の向上を実感していることが確認できた。

ⅳ　資質④「課題発見および設定力」

本開発単位において最も重視しているのがこの「課題発見および設定力」である。講師から課題を提示される「リージョン探究」とは異なり、本開発単位では、「教育」「福祉」「女性」「環境」の４つのテーマの中から、グループおよび個人で課題を発見・設定した上で探究活動を行わなければならず、その難易度を一段階あげている。今年度は、ガイダンスの際に「設定した課題は自由に変更してもよいこと」、「グループ編成後にも課題設定を行う期間をしっかり確保していること」の２点を意識して丁寧に行った。それが今回の結果に反映されているのかは定かではないが、昨年度よりも本項目の数値が向上しているのは成果の 1 つと言えるだろう。

		2021年度	2020年度
課題発見および設定力	向上した	82.0%	75.9%
	向上していない	4.0%	3.2%
	分からない	14.0%	20.9%

なお、レポートからは、【テーマの選択のみで自由に課題を設定してもよいという「グローバル探究」の活動はとても難しいものだったのだと今なら分かる。世界中に解決しなければならない問題はたくさんあるが、今の私たちができることにも限界があると思うからだ。私は「リージョン探究」の反省から、「グローバル探究」ではアイディアだけでなく、そのアイディアを行動に移したいと考えていた。そういう点からも今回取り組んだ現地で手に入るもので作る水のろ過装置の活動を通して、「課題発見および設定力」の向上を実感できている：福祉】としっかり運営側の意図を汲み取って質の高い探究活動に取り組んだ生徒の姿を確認することができた。

また、【自分たちでは適切な課題設定ができているか自信はなかったが、発表のアドバイスシートで「斬新な発想でとても興味深い発表でした」というコメントをもらったことがとてもうれしく、自信になった：教育】と他者からの評価が成長の実感に繋がった例も確認することができた。生徒にとって課題設定を行うということは非常に難しいチャレンジであると同時に、難しいからこそ大きな自信へと繋がるものであるということが分かった。

ⅴ　資質⑤「課題解決力」

アンケートの結果からは、本項目においても昨年度と比較し、更なる成果の感じられる結果が出ている。

		2021年度	2020年度
課題解決力	向上した	80.5%	73.1%
	向上していない	5.4%	3.1%
	分からない	14.1%	23.8%

生徒のレポートからも【私たちは「性教育」をテーマに探究活動に取り組んだ、社会ではその問題

に触れることすら好意的に受け止められていないように感じていたが、「グローバル探究」では全く制約なく自由に取り組むことができたのがとてもうれしかった。自分たちなりにこれからの「性教育」の在り方について具体的にまとめることができたという実感があるので、それが社会的にどのように評価されるのかは別にして、難しいことにチャレンジし、具体的な提案へと繋げる力は確実に向上したと思う：教育】、【これまでは社会が大きく変化するなどと思ったことがなかったが、実際に社会が変化するのを目の当たりにした今「地域協働事業」のような活動はとても大切なものなのではないかと感じている。今の自分が社会に役に立つほどの「課題解決力」を有しているとまでは思わないが、この活動に取り組んでいなかった自分と比較すると、大きく「課題解決力」は向上したと思うし、何よりも将来に対する意識が変わったと思う：福祉】と現在の社会情勢に後押しされながら、本事業の意図をつかみ、探究学習に取り組んでいる生徒の姿は多く見られている。

反面、昨年度も存在していたが、【「リージョン探究」でも思ったが、今の私たちにできることなど何もないと思うのに、こんなことをやらされている意味が分からない。専門的な知識や技術がない私たちが取り組んでも無駄だと思うし、自分たちの出した解決策もとりあえずまとめたというものに留まっている：環境】などと一部ではあるが、目に見える成果といった部分にこだわるネガティブな意見が見られた。「〇〇力」を伸ばすという目標はあくまでも形式的なものであり、本質的に大切にしたいのは、生徒たちの社会に対する意識の改革なのであるが、どうしても一部の生徒たちに伝わらないことは今後に向けての課題と言える。

vi 資質⑥「表現・発信力」

アンケートの結果としては昨年度と比較すると数値は向上しているものの、昨年度と同様に今年度も８つの資質の中で最も生徒の成長実感の乏しい資質となっていた。これは、現状の形でアンケートを実施していない初年度からも継続している傾向であり、本学生徒の大きな特徴の一つかもしれない。

		2021年度	2020年度
表現力・発信力	向上した	75.8%	64.1%
	向上していない	9.4%	7.3%
	分からない	14.8%	28.6%

生徒のレポートからは、「緊張したが、しっかり発表できた」という意見も見られたが、【ロイロノートやパワーポイントなど発表用の資料については、メンバーで協力し、それなりのものができたと思うが、やはりカメラや人の前で話すということについては全然できていないと感じた。特に、中間発表の時には、カメラの前ということもあり、発表の原稿をただ読むだけだったように思う：女性】、【私は昨年他の学校の生徒の発表を聞く機会があり、その人たちが堂々と自信を持って自分たちの活動について話していたので、自分もそのようになりたいと思っていた。しかし、やはりいざ人の前で話すとなると緊張してしまい、覚えていた発表内容も真っ白になってしまい、結局原稿を読むだけになってしまった：福祉】と口頭での発表に対して苦手意識を持っている生徒が多いことに改めて気付かされた。コロナ禍において人前で発表する機会が少なくなっていることも影響しているとは思うが、そもそも日常の学校生活の中で、自らの考えや思いを日常的に表現することが少ないため、口頭発表の場が非常に特別な場という形で認識されているのかもしれないと感じている。

vii 資質⑦「主体性」

探究学習を導入したことによって、教員にとって最も大きな生徒の変容として受け止められてい

るのがこの項目である。しかし、過去 2 年のアンケートでは思うような結果が出ていなかった。しかし、今年度については「向上していない」という生徒も若干増えたものの、「向上した」と回答した生徒が昨年度と比較して 10%近く増加するという結果が出ている。

		2021年度	2020年度
主体性	向上した	80.7%	70.9%
	向上していない	6.7%	5.9%
	分からない	12.6%	23.2%

生徒アンケートからは、【昨年度の「リージョン探究」は新型コロナウイルスの影響もあって活動の制約が多かったが、「グローバル探究」では、自分たちの工夫次第で色々な活動に取り組むことができた。ZOOM などを用いてオンラインでインタビューさせていただけたことは、将来を意識するとても良い機会だったと思う：教育】、【以前カンボジア研修に参加した先輩方の報告会に参加し、同じ学校の先輩たちが積極的に活動している姿に憧れを持ち、高校 2 年生になったら自分もカンボジアに行きたいと思っていた。残念ながらこのようなことになってしまい、海外体験はできなくなってしまった。しかし、以前とは違い、今はオンラインで簡単に海外の人とも話をすることができる。今回私は海外に住む日本の方にインタビューを行ったが、今までの自分だったら考えられないことだと思っている：福祉】などと、昨年と異なりオンラインが当たり前のものとなり、それを積極的に活用することでこれまで不可能だと思われていたことが可能になるなど様々な広がりを実感できたことが、結果的に自らの「主体性」の向上の実感にも繋がっているように感じられた。

ⅷ 資質⑧「多様性受容力」

アンケートの結果を見ると、他の項目と同様に 84.7%の生徒が「多様性受容力」の向上を実感しており、取り組みの成果が感じられる結果となった。しかし、開発単位Ⅰ「リージョン探究」においては、コースやクラスの枠組みを取り払ってグループ編成を行うことで、意識的に「多様性受容力」を育成しようとするアプローチを行ったが、高校 2 年生は医進、特進、学際とそれぞれコース毎に授業単位数が異なっていることもあり、昨年度と同じ形ではグループ編成を行うことができていないため、「グローバル探究」はクラス内での活動が中心となっている。そのため、他者との「違い」を感じる場面は少ないと想定している中で高い数値が出たことは興味深く、生徒のレポートからその理由を探ってみた。すると、【「グローバル探究」は 4 つの分野に分かれているが、同じ分野を選択しているのに、発表がこれほど多岐に渡るということに驚いた。グローバルな社会課題はたくさんあるとは思うが、個人個人でこれほど興味や関心が異なるということを改めて強く感じた：教育】、【今回の「グローバル探究」を通して、現代の社会は徐々に多様性を許容できるようになってきているのだと感じることができた。「女性の働き方」や「夫婦別姓」、「LGBTQ」など、これまで一律にこうすべきであるとされてきたことに対して、少しずつではあるが社会が対応しようとしているということだと思う。だからこそ、私たちにも「多様性受容力」という力は必要なものだと感じた：女性】などとガイダンスや各種のアンケートなどの機会を用いて、育成したい 8 つの資質について繰り返し伝えているからこそ「グローバル探究」における様々な学びの場面と育成したい力との連携ができるようになりつつあることは、本事業に

		2021年度	2020年度
多様性受容力	向上した	84.7%	80.0%
	向上していない	2.7%	2.7%
	分からない	12.6%	17.3%

おける大きな成果の１つと言えるだろう。

ix　その他の資質

本開発単位終了後のアンケートで「『グローバル探究』の活動を通して、向上したと感じる能力で上記に含まれていないものがあれば教えてください」という項目を実施した。以下に主なものを記載する。

・人の話を聞く力
・情報を収集、整理する力
・物事に対して、徹底的に取り組む力
・計画し、それを実行する力
・依頼メールを作成する力
・礼儀やマナー

10　事後アンケートの集約

9でも述べた通り、本開発単位終了後に、学びの効果を測定するためアンケートを実施した。上記に含まれなかった項目を以下にまとめる。

〇質問項目

①「グローバル探究」の学びを通して、将来「（自らが生活する）地域」で地域の未来のために貢献したいという思いが強くなった。

	2021年度	2020年度
当てはまる	90.0%	86.8%
当てはまらない	10.0%	13.2%

②「グローバル探究」の学びを通して、将来他地域や他国で生活することになったとしても、何らかの形で「（現在自らが生活する）地域」の未来のために貢献したいという気持ちが強くなった。

	2021年度	2020年度
当てはまる	89.3%	85.0%
当てはまらない	10.7%	15.0%

③「グローバル探究」の学びを通して、これからの社会を生きていく上では、「答えが一つとは限らない課題」と向き合っていく必要があると感じるようになった。

	2021年度	2020年度
当てはまる	97.3%	97.7%
当てはまらない	2.7%	2.3%

④「グローバル探究」の学びを通して、英語を学ぶことの重要性を感じるようになった。

	2021年度	2020年度
当てはまる	87.3%	70.9%
当てはまらない	12.7%	29.1%

⑤「グローバル探究」の学びを通して、様々な課題に対して、複数の視点からアプローチができるようになった。

	2021年度	2020年度
当てはまる	88.7%	75.0%
当てはまらない	11.3%	25.0%

⑥「グローバル探究」の学びを通して、自分には良いところがあると感じることができるようになった。

	2021年度	2020年度
当てはまる	75.7%	58.2%
当てはまらない	24.3%	41.8%

⑦「グローバル探究」の学びに対する自らの姿勢を自己評価してください。

		2021年度	2020年度
S	楽しみながら積極的に取り組むことができた	35.3%	39.1%
A	積極的に取り組むことができた	56.7%	50.6%
B	あまり積極的に取り組むことができなかった	7.3%	10.0%
C	消極的にしか取り組むことができなかった	0.7%	0.3%

11　昨年度の課題とその対応

最終年度となる３年目の今年度は、新型コロナウイルスへの対応、「グローバル探究」に取り組んだ高校２年生における「Key Girl」の８つの資質の成長実感数値の向上といった部分で大きな成果をあげることができたと認識している。しかし、昨年度の本報告書で挙げた課題について、どのように対応したかについてはしっかりと検証しておきたい。

ⅰ　「探究活動の質」と「発展的活動の難しさ」

今年度「グローバル探究」に取り組んだ高校２年生は、昨年度の開発単位Ⅰ「リージョン探究」における探究活動において調べ学習の延長線上にとどまったものが多数見られた学年であった。また、昨年度は各学年から選抜された優秀班が口頭発表を行う研究成果発表会も中止になってしまうなど、「探究活動の質」の目安となるような他者の発表を聞くにも恵まれない学年となってしまった。しかし、本事業が年を経るごとに学内において当たり前のものと認識されてきたこと、各分野の講師の先生方の生徒に対する関わり方が安定してきたことなどが要因となり、詳細は後述するが本事業の締めくくりにあたって実施した「最終成果発表会」に参加した生徒たちを中心として、かなり深く探究活動に取り組んだ様子を確認することができた。

また、１月から３月に設定された発展的活動については、一部の生徒が要請を受け、同じ和歌山県内にあり、SGH ネットワーク校の認定を受けた和歌山県立日高高等学校の第２学年探究成果発表会のポスター発表に参加するなどの活動は行ったものの、やはり新型コロナウイルスの感染拡大を予防する観点からも外部機関との連携を奨励することは難しいという結論となった。

ⅱ　「表現・発信力」の育成

開発単位Ⅰと同様、昨年度は新型コロナウイルスの影響を受け、ポスター発表などの対面型の発表形式を実施することができなかったことから生じた課題であると考えている。そのため、今年度は「グローバル探究」実施学年である高校２年生の担当教員と連携しながら、特に瞬間的な受け答え能力を磨くために、しっかりと感染対策を行った上で、発表後の質疑応答を行うことを目指した。その一つの完成の形としては本事業の３か年に渡る成果の報告を行った「最終成果発表会」であるが、オンラインの発表会でありながらも、ICT 機器を活用することで、良質な質問とはどのようなものかということを生徒に提示できるという点で口頭発表以上に「表現・発信力」の向上に役立つ手法を見つけることができた。詳しくは、「⑦最終成果発表会」の項目にて述べる。

ⅲ　客観的かつ適切な評価活動の実施

本学では、８－ⅱ表１および表２にて紹介したルーブリック評価表を用いて、自己評価や他者評価を実施している。しかし、昨年度は他者評価において、今後の人間関係などへの配慮からどうしても無難な評価をせざるを得ないという課題が残った。

そこで、今年度はガイダンスや各種の連絡の機会を通して、本当の意味で他者を育てる適切な評価の大切さを訴えかけた。今年度はその取り組みを始めたばかりであるため効果の程ははっきりとはしないが、これも継続していくことで客観的かつ適切な評価活動が当たり前のものとなると考えている。なお、以下に評価活動に対する今年度の意識変化についてのアンケートの結果を載せるが、評価に対して無関心だった層が減少していることを見てとることができる。

	中間発表後	最終発表後
相手のことを考え、客観的かつ適切な評価やアドバイスができた	64.2%	64.7%
もう少し厳しい評価やアドバイスを行いたかったが、相手の感情が気になり、甘いものになってしまった	25.7%	32.7%
評価をしなければならなかったため行っただけで、適切なものではない	10.1%	2.6%